

42018

教科書文庫

4
810.
41-1918.
200030
2242

T7  
1918

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

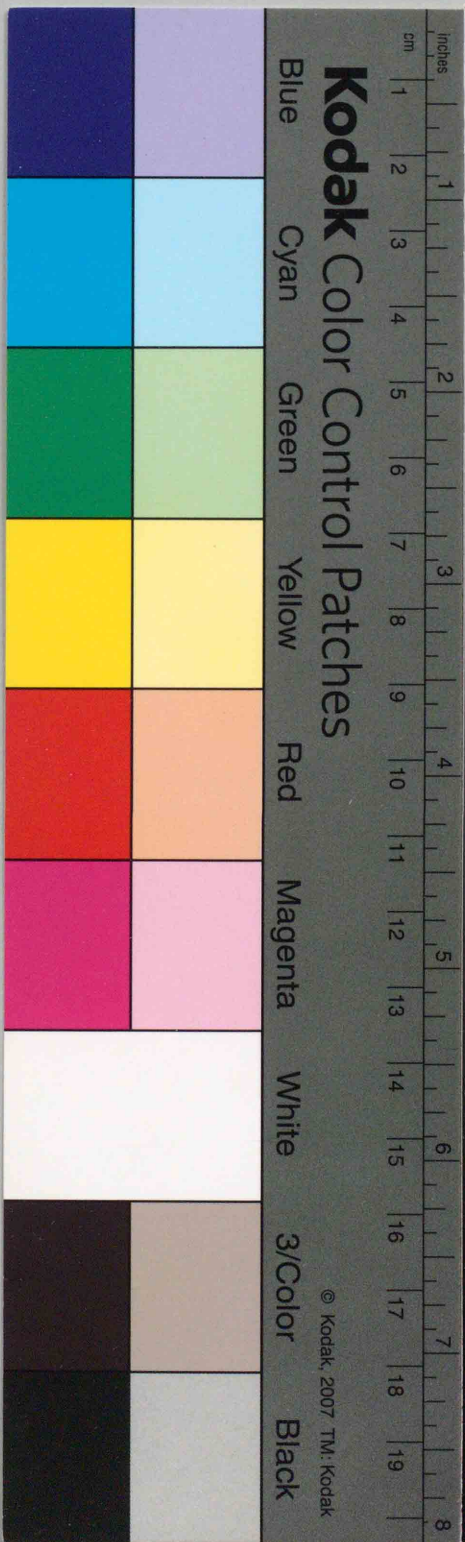


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
H019  
資料室

大正國語讀本

修正版

卷六



保科孝一編 修正版

大正國語讀本



東京 會社資育英書院發兌

大正國語讀本(修正版)卷六

目次

- 一 花のさだめ……………本居宜長…一
- 二 雪前雪後……………幸田露伴…五
- 三 月の洞庭湖……………佐々木信綱…一一
- 四 伊太利の沿海……………森林太郎…一七
- 五 雄大の調(韻文)…………………………二五
- 六 立志の由來(候文)……………渡邊肇山…二九
- 七 士農工商……………藤岡作太郎…三六
- 八 伊藤公を誅ぶ……………井上馨…四三

目次

九 木曾の奇勝……………(章 枕)…四八

一〇 旅ごゝろ(韻文)……………島崎藤村…五五

一一 三浦半島……………川上眉山…五八

一二 永訣狀(候文)……………大高源五…六四

一三 朱舜水と安東省庵その一……………(朱 舜 水)…七三

一四 朱舜水と安東省庵その二………………七八

一五 蘇 武(韻文)……………坪内逍遙…八三

一六 白峯の陵……………上田秋成…八七

一七 島の爲朝……………瀧澤馬琴…九一

一八 榊原康政その一……………新井白石…九六

一九 榊原康政その二………………一〇〇

二〇 仁和寺の法師……………吉田兼好…一〇六

二一 嗟哦のほとり……………村山龜齡…一一〇

二二 元祿調(韻文)………………一二四

二三 狐 塚……………(續狂言記)…一二六

二四 花月草紙抄……………松平定信…一二五

二五 支那の國民性……………徳富猪一郎…一三三

二六 戦争の結果……………鹿子木員信…一四〇

大正國語讀本(修正版)卷六



一 花のさだめ

本居宣長

花はさくら。さくらは、山櫻の葉あかくてりて細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも、しなぐの有りて、こまかに見れば、一本ごとにいさゝか變れるところ有りて、またま

た同じきはなきやうなり。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松などの青やかにしげりたるこなたに咲けるは、ことに色はえて見ゆ。空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花ともおぼえぬまでなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。梅は紅梅、ひらけさしたるほどぞいとめてたきを、さかりになるまゝに、やうくしらけゆきて、見どころなくなるこそいとくちをしけれ。さくらの咲けるころまでも、散ることしらで、むげににほひなく、ねび

在りて世の中云々  
 のこりなく散るぞめてたき  
 櫻花ありて世の中はてのう  
 ければ（讀人  
 知らず、古今  
 集）

れしほみて残りたるを見れば、げに在りて世の中は何事もみなかくこそと、見る春ごとに思ひ知らるか。白きはすべて香こそあれ、見るめはしなおくれたり。大かた梅の花は、ちひさき枝を物にさして、ちかく見たるぞ、梢ながらよりはまされる。桃の花は、あまた咲きつゝきたるを遠く見たるはよし、ちかくてはひなびたり。山吹かきつばたなでしこ、萩すゝきをみなへしなど、とりどりにめでたし。菊も、よきほどにつくろひたるこそよけれ、あまりうるはしく、したゝかにつくり

なしたるは、中々に品なくなつかしからず。つゝじ、  
野山に多く咲きたるは目さむること、ちす。海棠と  
いふ物、唐めきてこまやかに、麗しき花なり。  
そもくかくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ。  
人は又おもふ心ことなるべければ、ひとやうに定む  
べきわざにはあらず。又いまやうの世の人もては  
やすめる花どもも、世におほかるをかぞへいでぬは、  
ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、ふ  
るき物にも見えたることなきは、心のなしにや、なつ  
かしからずおぼゆかし。されどそれはたひとやう

なるひがごころにやあらむ。(玉かつま)

二 雪前雪後

幸田 露伴

雨も好し、露も好し、霰も霽も天より降るもの、面白  
からぬは無きが中に、雪はまた特にめてたし。降ら  
んとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無  
き寒さに雀ふくらむ程は、兎もあれ角もあれ、そと下  
す風に連れて、ちらくくと降出づる始より、檐の玉水  
日に耀ふ光長閑かに融け盡す終まで、いづれかをか  
しからざらん。

先づ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇には痛く跳ね返りなどしつゝ、さら／＼と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく軽らかに降りて、落つる間もなく色無き水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消ゆる／＼も少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松・榎・樅などの梢には天華俄かに落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時の

ことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖さ未だしければ、雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲をあざむき、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで、蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。すべて降る時の眺には、廣きところより狭きところ

好し。玉屑球塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして、廣きは却つて狭くなり、近きは聊か霞みて、狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。塵埃拭ひ盡して、鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊去つて、白銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の、取りどころ無きだに面白く

馬をさへ  
馬をさへ眺む  
る雪のあした  
かな。(芭蕉)

西の京

京都

金閣

金閣寺、京都  
の北山に在

り。

銀閣

銀閣寺、京都  
市浄土寺町に

在り。

真如堂

京都神樂岡の  
東南山中に在

り。

岡崎

神樂岡の南角  
にあり。今岡

崎町と稱す。

おもはる。馬をさへ眺むると人の云ひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。西の京は金閣銀閣真如堂岡崎東山清水皆畫とすべし。柵尾檜尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、壁の簷を戴ける松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんと、二十年の昔の、余の胸に猶あざやかなり。



梅尾・楨尾  
何れも京都市外にある山。紅葉の名所。之に高尾を合せて三尾山と稱す。

東の京

東京

山王臺

麴町區に在り、日枝神社を祀る。

溜池

山王臺の東南麓にありしが、今は埋められて宅地となる。

不忍の池

上野公園に在り。

待乳山

隅田川の右岸、淺草公園に近き小丘。

東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、また比ひ無くめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔いたづらになつかし。不忍の池一望千頃の景はいはずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何か物言ふ鴨のさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとかや云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。

相生橋

深川區越中島より京橋區新佃島に架したる橋。

中島

深川區越中島の一名。

一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流る、川なりと稱ふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶ可く、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(洗心録)

洞庭湖

支那本部中第一の大湖。湖南省の北部に在り。

三

月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三

岳陽樓

岳州の地は天岳の南に在る故に岳陽とも稱す。

此の樓は岳陽に在る故に名とす。

岳州府城

岳州府城とは府治のある町の事にて此の町を岳州といふ。

范文正公

層樓である。城壁の甍瓦は幾百年の風霜に黒ずんでゐる。建てをほしてまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。船を捨て、上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。それは蘆のまる屋とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その間を通りぬけて高い石段を上り、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記

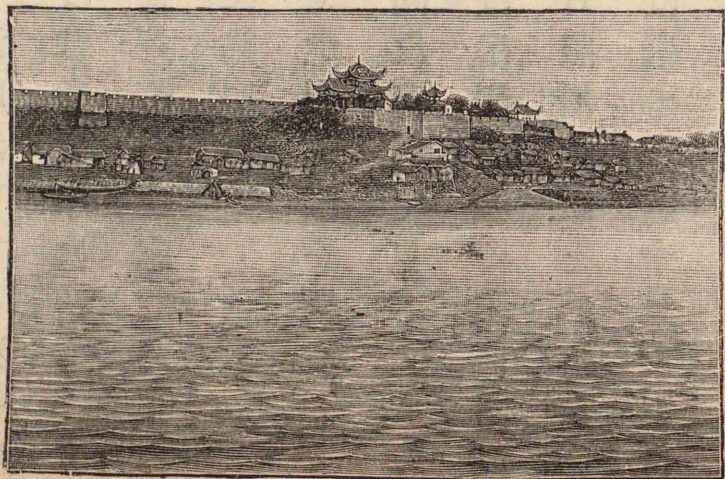
宋代の人。范仲淹。その岳陽樓記中に、「衡、遠山、吞、長江、浩々湯々、横無際涯、朝暉夕陰、氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。」とあり。

江の島

相模鎌倉郡の海岸にある島。

を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯々洞庭湖は目の前に天地の大幅を廣げてをる。湖の門戸には彼の堯の女の湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に、何れも江の島

岳 陽 樓



位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子狛犬の如くである。今や夕日は其の真中に落ちようとしてゐる。天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めて居たが、促し立てられて船に歸つた。

幸に風は追手。帆を張つて愈洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二つの島の間落ちて、見る／＼紅の玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上に月は昇る。さながら「洞庭八百里、月照岳陽城」といふ詩のとほりである。日を數ふれば恰も舊曆十月十五日の夜で、かの瀟湘八景の一なる洞庭秋月ではないが、望

瀟湘 洞庭湖の南なる瀟水・湘水の流るゝ地。其の八景は次の如し。  
平沙落雁。遠浦歸帆。山市晴嵐。江天暮雪。洞庭秋月。瀟湘夜雨。遠寺晚鐘。漁村夕陽。

皓月千里云。岳陽樓記中の句。

月の夜、洞庭を過ぎるとは、何といふ好因縁であらう。夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、晝にも寫しがたく麗しい中を、遙かに一帆又一帆。風のまに／＼遠く近く且顯れ且消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだらばと思はれる。美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈澄み上る。見えるものは唯黄金白銀の波。  
「皓月千里、浮光躍金」といふ有様である。 廣い果知ら

卓彦恭  
宋人傳聞く。

ぬ湖の上、進み行く我が船の近くに二三の釣舟が居る。昔、卓彦<sup>\*</sup>恭が洞庭を過ぎた時、月下に釣せる小舟を呼びとめて、「魚ありや、否や」と問うたに、老人らしい聲で、「魚はないが詩がある。」卓喜んで、「願はくは一篇を聞かん。」老人柁を鼓ちて、「八十滄浪一老翁、蘆花江上水連空。世間多少乗除事、良夜月明收釣筒。」と高吟し去つたといふ。さる風流の漁翁のありやなしやは知らぬが、二三の小さな釣舟は、たしかに大いなる湖の月夜の景趣を添へるのであつた。月は良く、風は追手。船は帆腹飽満、一瞬千里の勢で

進む。夜はふける。月はいよく澄む。此の意人の識るなし。いひしらぬ樂しさ、寂しさ、何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が身そゞろに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月、かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれて、風月の縁に富むことを天に謝したことであつた。  
(帝國文學)

四 伊太利の沿海

森 林太郎

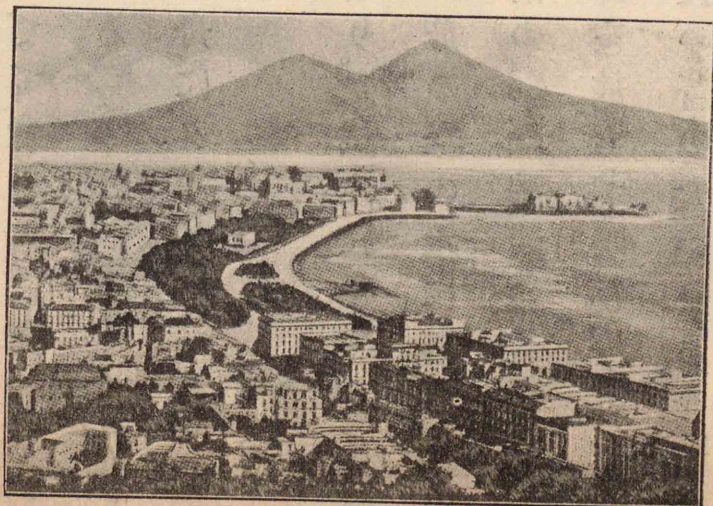
Capri  
伊太利の西  
沿海にある  
小島。

Sicilia  
(Sicily)  
伊太利南  
端に在る  
大島。

僧堂を辭し去る朝、大空は灰色の紗を被せたる如く  
なりき。岸には腕たしかなる漕手幾人か待受け居  
て、我が一行を舟に上らしめたり。纜を解きてカプ  
リに向ふ程に、天を覆ひたりし紗は、次第に斷れて輕  
雲となり、大氣は見渡す限り澄み透りて、水面には一  
波の起るをだに認めず。  
舟のゆくては杳茫たる蒼海にして、その抵る所はシ  
チリヤの島なり、いな、亞弗利加の北岸なり。左手の  
方は巖石屹立したる伊太利の西岸にして、所々に大  
いなる洞穴あり。洞前に小村落あり。其の幾個の

人家、わざと洞中より這ひ出でて、背を日に曝すもの  
の如く、洞の直ちに水に臨めるもの前には、漁人の  
火を焚きて食を調へ、又は小舟にタールを塗れるあ  
り。  
舷下の水は碧くして濃かなり。試みに手をもて探  
れば、手も亦水と共に碧し。舟の影の水に落ちたる  
は、極めて濃き青色にして、櫓の影は濃淡の紋理ある  
青蛇を畫がけり。われは聲を放ちて叫びぬ、げに美  
しきは海なるかな。若し彼の蒼の大いなるを除か  
ば、何物かよく之と美を較ぶべき。我は幼かりし時、

地に仰臥して天を觀たるを思ひ出でぬ。今見る所の海は、即ち當時見し所の天にして、譬へば夢の一變して現となれるが如し。舟は巖より成れる三小嶼の傍を過ぎぬ。その小嶼のさま、海底より石を築き上げて、その上に更に石塔を僵し掛けたる如し。青き波は綠なる石を洗へり。



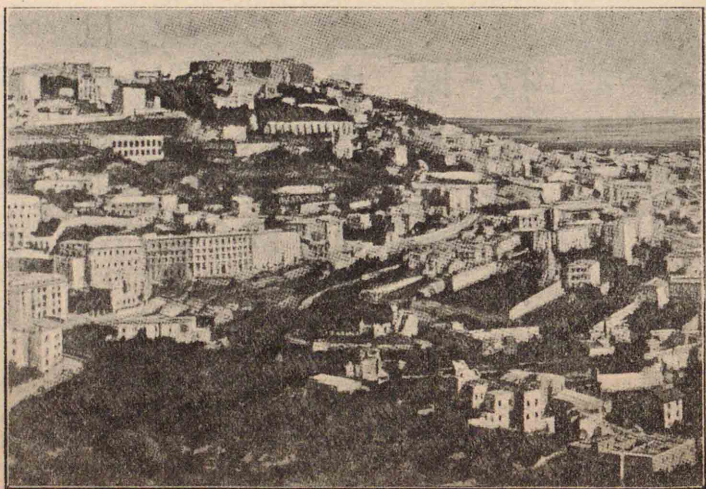
ナボリヨリ

Tiberius

Minerva

想ふに風雨一たび到らば、このあたりは羣狗吠ゆてふ鳴門の怪の栖スミカなるべし。不毛にして石多きミ\*子ルワの岬は、眠るが如き潮これを繞れり。いにしへ妙音の女性の住めりきといふは此處なり。而してカプリの風流天地はこれと相對せり。いにしへチベリウス帝が奢\*を極め、情を

ベスビオ山を望む



縦にし、灣頭より眸を放ちてナポリの岸を望みきといふは此處なり。舟人は帆を揚げたり。我等は風と波とに送られて、漸くカプリの島邊に近づきぬ。水のまことの清らかさ、まことの明かさを知らんと欲せば、この海を見ざるべからず。舷に倚りて水中を見れば、一塊の石、一叢の藻、歴々として數ふべく、晴れたる日の空氣といへども、恐らくはこの玲瓏透徹なからんとぞ思はるゝ。

カプリの島は唯一面の近づくべきあるのみ。その

他は皆削り成せる斷崖にして、その地勢ナポリに向ひて級を下るが如く、葡萄と橘・柚・橄欖の林とは、交る交るこれを覆へり。岸に沿へる處には、數軒の蟹舎アサギと一棟の哨舎とを見る。稍、高き林木の間に、屋瓦の羣を成せる小都會あり。一橋一門ありてこれに通ず。一行は棕櫚の木立てる酒店の前に歩を留めつ。われは此の島を一週し、南に突き出でたる大石門をも見ばやとて、漕手二人を呼び、岸なる舟に乗りうつりぬ。風少し起りたれば、行程の半ばかり帆の力に頼る

ことを得たり。巖壁に近き處には、漁人の網を張りたるあれば、舟はこれを避けて沖の方へ進みぬ。既にして奇景の人目を驚かすに足るものあるを見る。灰色なる巨石の直立すること千丈なるあり。其の頂は天を摩し、所々僅かに一石塊を容るべき罅隙を存して、蘆薈などこれに生じたり。青き焰の如き波に洗はれたる低き岩根には、紅の海百合いと繁く着きたるが、その紅の色は水を被りて愈紅に、岩石の波に觸れて血を流せるかと疑はる。既にして、我等は海を右にして島を左にする處に至

りぬ。水を吞吐する大小の窟許多ありて、中には波の返す毎に、僅かに其の天井を顯すあり。こは彼の妙音の女怪の棲處にして、草木繁茂せるカプリの島は、唯之を蓋へる屋根たるに過ぎざるにやあらん。

(即興詩人)

五 雄大の調

菅原道眞母

久方の月の桂も折るばかり

家の風をも吹かせてしがな

源 實 朝

菅原道眞母  
參議菅原是善  
の妻。

源實朝  
鎌倉の三代將  
軍、其の歌集



に金栴集あり。

山はさけ海はあせなむ世なりとも

君にふた心われあらめやも

武夫の矢なみつくるふ籠手の上に

あられたばしる那須の篠原

後嵯峨天皇

敷島ややまと島根の朝がすみ

唐土までも春は立つらし

宗良親王

君のため世のため何か惜しからむ

捨ててかひある命なりせば

宗良親王  
後醍醐天皇の  
皇子。

賀茂眞淵

國學者四大人  
の一人。

信濃なる須賀の荒野を飛ぶ鷺の

賀茂眞淵

翼もたわに吹くあらしかな

本居宣長

敷島のやまと心を人とはば

朝日に匂ふ山ぎくら花

平野國臣

青雲のむかふす極みすめるぎの

御稜威輝く御代になしてむ

千種有功

千種有功

徳川時代後期  
の公卿にして  
有名なる歌人。

平野國臣

幕末の志士に  
して、福岡藩  
士。

本居宣長

國學者四大人  
の一人。賀茂  
眞淵の門人。

賴三樹三郎  
京都の儒者。  
賴山陽の第三子。

天地とたちわかれけむ始ありて  
はてこそなけれ葦原の國  
浮雲のおほふ姿はかはれども  
萬代おなじ天つ日の影

賴三樹三郎

佐久間啓

幕末の先覺者、松代藩士。號を象山と云ふ。

武藏の海さしいづる月は天とぶや

佐久間啓

かりほるにやに残る影かも

大國隆正

大國隆正

幕末の人、津和野藩士にして和學者。初姓野々口。

立てそむる志だにたゆまずば

龍のあぎとの玉も取るべし

六 立志の由來

渡邊 率 山

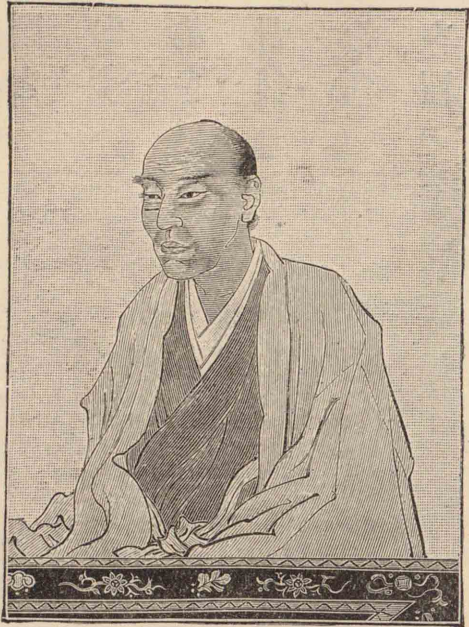
備前侯  
岡山の藩主。

私十二歳の時、日本橋邊通行仕候節、忘れも仕らず、備前侯の御先供に當りて打擲を受け、子供ながらも大息仕候は、右備前侯も御歳は大體同年位にて、大衆を率ゐて御通行被成候事、天分とは申しながら同じ人聞なるにと、發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來可申と存じ、その頃高橋文平と申すもの御祐筆を勤め候が、私子供には候へど

爽鳩  
姓は鷹見、田原侯の家老にして漢學に長ず。

も合口にて候間、これに相談仕り、爽鳩先生の門に入り、儒者に相成可申と決心仕候。さりながら私父二十年來の持病にて、一日も看病按摩仕らざる日は無之、これを奉公同様にて心得、母の手だすけ仕候。その上兄弟皆幼少にて、七人程も有之、唯母の手一つにて、病父も私共もその日を送り候事故、右様の餘裕も無之、貧窮は筆紙の盡す所には無之候。依之弟共は寺に奉公に遣し、又は出家致させ、妹は御旗本へ奉公に遣し候。一人の弟は私十四歳ばかりの時、板橋まで生き別れに送り参り候時、雪はちらくふり來り、弟

は八九歳にて、見も知らぬ荒男に連れられ、後を振向き振向き別れ候ひし事、今に目前に見ゆる如くに御



座候。

渡 私母、近頃まで、夜中寢  
邊 ね候に蒲團、夜着を引  
率 きかけ候を見及び不  
山 申、やぶれ疊の上にご  
ろ寢仕り、冬は火燧に

ふせり申候。私父大病故、高料の藥種藥禮、日々の麵類等に事かき、疊、建具の外大抵質物に置き盡し、尙親

類共にも借財し盡し、僅か南鐐一片の儀にて、母方の身内の者の本所一つ目に住居し候方へ母事助右衛門と

申す

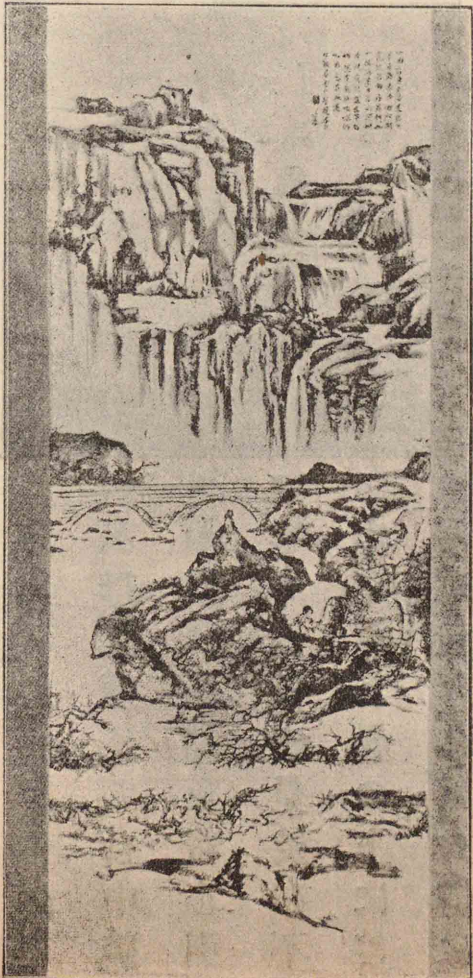
弟を

背負

ひ、雪

を冒

華 山 筆 蹟



して罷越し、夜に入りて歸宅仕候。その節私洗足の湯を沸し候とて、衣服を焦し、大いに叱られ候儀、今に

覺え罷在候。

依之尙高橋文平に相談仕候に、とても儒者に相成候

とて金のとれ候儀は無之、貧を救ふ道第一なりと申

すにより、十六歳の時、爽鳩先生を頼み、芝の白芝山と

申す畫工に入門仕候。然るところ貧人にて附届不

行届なりとて、僅か二年にて師家より斷を受け申候。

私もこの時は如何仕るべきかと泣きしづみ候が、父

の申候につきて、金陵の弟子と相成候。金陵ことの

外憐みて教へくれ候間、少々は晝も出來候様に相成

候へども、半紙を調へ候手段無之、初午燈籠の晝を作

白芝山  
姓は白河、漢  
人風に白と呼  
ぶ。書家にし  
て畫家。

金陵  
姓は金子、江  
戸の畫工にし  
て谷文晁の弟  
子。

文晁  
姓は谷、江戸  
の畫工として  
有名なる人。

一齋  
姓は佐藤。  
幕府の儒官。

り、百枚にて一貫の錢を取り、これにて紙筆を求め申候。學問は仕りたく候へども、何分閑暇無之、冬に相成候へば、朝七つ時に起き出でて、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候。右は文晁\*など私を憐み、畫道取立てくれ候節、彼の人毎日拂曉に起きて畫を認め候咄を承り、奮發致し候儀に有之候。

私二十六歳の正月元日、朋輩うち寄り候節、私申候は、上かくの如き御困難なれば、各方も拙者も今より心かけ、御政道を佐け可申と契約致候。依之一齋\*にも申し談じ、學問仕度候へども、寸暇も無之、夜中にても

參り可申と存じ、父より門限御猶豫の儀願ひ候處、聽き届け難き旨の御沙汰につき、終に折角の志も挫け申候。つらく存候へば、上にして君に忠、下にして親に孝ならむ事、皆學問の力により候。わけて御政道に與りて、上に忠ならむ事、無學にては叶ひがたく候へば、愈、繪事を専らとして窮を救ひ、少しにても親に安堵せさせ申度と、これよりは一生御役儀相勤め候はむとは思ひ寄らず、急にしては家の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成申すべき一事に、思を定め申候。(舉山全集)

七 士農工商 藤岡作太郎

士農工商は維新以前に於けるわが國民の四階級にして、町人の子は町人、百姓の子は百姓、人の階級生れながらに定まりて、偶、向上の志を有するもの、起ちてその階級の外に出でんとすれば、身の程を知らぬものとして嗤笑せらる。生活状態はこの階級に従ひて各、その分とするところあり、これを越えて身を飾るを得ず、これを越えて口に食するを得ず。大名の行列の一見その誰なるかを明かにしたるも、趣は即

ち一なり。かゝる階級の差別は何より生ずるか、職業の世襲これその因なり。今日の世は家々の業務定まらざれば、たゞ財産の多寡のみ階級を立つるの尺度たれども、職業世襲の世は職業そのものに高下の別なきを得ず。この職業世襲の風は徳川時代に至りて始めて起れるにあらずして、實に開闢以來の國風なり。所謂族制政治とは、やがて此の職業によりて家族を別つの制度なり。大化の改新に當り、一たびこれを改めて、人材登庸の途を開きしかども、幾何もなくし

て再び舊制に歸りぬ。けだし族制政治はおのづから祖先崇拜の風を生む。祖先の由來をたづねて、わが家の尊きを思ふは、日本國民の美德なり。さればこそ上古既に氏姓を正すのこゝとあり、平安朝に於てシヤウ姓氏録コを編みしもまた同じ動機に出づ。かの勇士が戰場に臨んで敵に名乗を上ぐるも、また己が由緒ある家柄を示さんとにあらざや。こゝに於てか家の系圖といふもの大に重んぜられ、家あれば必ずその系圖あり、後世になりてはこれが研究を業とする系圖家なるものも生じ、遂には人情の弱點に乗じ

姓氏録  
詳しくは新撰  
姓氏録とい  
ふ。嵯峨天皇  
の勅によりて  
作れるもの。

て、その贖物を作るを職とするものさへ出て來るに至れり。

祖先崇拜と職業世襲の風とに伴ひて、家業の傳統も亦やかましくなりぬ。何々の業は誰より誰に傳はりて今日に及ぶといへば、人その權威を認むるも、師なき説は行はれず、先例なき業は成立ちがたし。師資相承とは即ちこの偏狹なる不文律の別名にして、こゝにおいてか、師はさらでもあるべきことにまて、口傳と稱し秘事と名づけて、その守るところを神聖にせんとすれば、弟子たるものはまたこれを遵奉

し、これを模倣して及ばざらんことをこれ恐る。こゝに至つてはその弊やむしる忍ぶべからざるものあり。消極的政略を主張とし、壓迫掣肘を綱領とする徳川時代において、その殊に甚だしきものありしは云ふを須ひざるべし。國民の活潑潑地なる個人的精神の發動これが爲に防遏せられ、鬱屈沈滯一時の風をなす。固よりこれが功過を嚴密に論ずれば、軍隊の秩序を維持し、國家を安泰に置くが如き點に於て得る所なきにあらずと雖も、精神的事業の如きは最も大なる打撃を被れりといはざるべからず。

既に個人に價值なくして、家系に權威あり、國家の單位は家にありて人にあらず。士一身一家の間に利害の衝突あれば、身を殺して家を立てざるべからず。片々たる家什の紛失せるが爲に、あたたら有爲の青年がその死を急ぐが如き事件は、屢、御家騒動に見るところなり。

士農工商の四段の階級は、正しくいはゞ公卿・武士・町人・百姓の四種に分つべからずや。中に就いて武士は世の花人の花、徳川時代における文化の中心はこれを措いて他に求むべからず。町人次に勢力あり、



土佐

土佐派の繪を指す。土佐派は平安朝の末に藤原基光、同隆能の開きたる畫の一派、歴史畫を以て顯る。

狩野

狩野派の繪を指す。狩野派は足利時代の中頃に狩野正信の開きたるもの。

浮世繪

戰國時代に岩佐又兵衛の開きたる世俗繪

いな寧ろ實力にかけては此或は彼の上にとせ  
ん。公卿と百姓とに至つては智識も勢力も遙かに  
下りて、その名稱直ちに迂愚固陋を意味せんとす。  
かくてまた文藝の嗜好もそれ〴〵相同じきを得ず。  
町人に稗史小説俳諧狂歌の類あれば、士人に和歌漢  
詩あり。彼は三味線、此は琴、後者の喜ぶところは土  
佐<sup>\*</sup>狩野にあれども、前者の弄ぶは新に起れる浮世繪<sup>\*</sup>  
なり。芝居と能と、將棋と圍碁ともまた面白き取組  
なり。要するに保守先例は士人にあり、進取創意は  
町人ひとりこれを領す。而して町人はその地位の

漸く多望なると共に、その間より出でし文學また大  
に見るべしといへども、すでにその階級の趣味卑俗  
なれば、その文學もまた高尚なるを得ず。明治初年  
における文學の凡下なる趣味は、いふまでもなくこ  
の江戸時代の系統を引けるなり。(東圃遺稿)

八 伊藤公を誅ぶ

井上 馨

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤  
博文公韓國兇徒の狙撃する所となり、暴かに清國吉  
林省哈爾賓驛に薨ず。嗚呼哀しいかな。予何ぞ多

言するに忍びむ。然りと雖も、予君と交る五十餘年、異體同心、生死苦樂を共にし、國步艱難の秋に始り、太平富貴の日にいたり、終始渝る事莫し。自ら謂ふ、交友の誼、今古に愧づる無し」と。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君、予の垂死を哭すること二回、予幸に君の交情、看護に因つて再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らむとは。嗚呼、哀しいかな。

回憶すれば、四十七年前、文久癸亥の仲夏、君、予と偕に發憤して海軍の術を學ばむと欲し、禁を犯し、潜かに

文久癸亥の仲夏

文久三年五月十二日、二人潜かにロンドンに航す。

馬關の攘夷

文久三年五月より八月に亘りて、長州藩が佛米英蘭の四國の軍艦と馬關にて戦ひし事。翌年償金を出して、落着鹿兒島の攘夷

文久三年六月

英艦鹿兒島に至つて生麥事件の償金を催す。薩藩と戦ひ九月講和

高杉

名は晋作。長州藩士

木戸

名は孝允。長州藩士

大久保

名は利通。薩州藩士

泰西に航し、居ること纔かに半年餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に還り、首として開國を唱へ、故國を危難より脱せしむ。

内訌尋いで起り、予は暗夜要撃に遭うて殆ど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を回復し、我が一大危機を轉過せり。已にして王政復古、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、君、木戸、大久保二公を佐けて尤も力あり。維新の績是よりして破竹の如し。進取の宏謀を翼賛し、維新の大業を成就す。敕を奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、その他、法律、制度

の設、槩ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり、勳業の盛を極め、首めに韓國統監となりて保護の範を立つ。

君、學漢洋を該ね、識東西に通ず。尤も東洋の平和を以て念と爲し、常に忠節道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いて文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂むとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。盡忠報國の至情に出づるに非ずんば、孰か能くかくの如くな

王臣云々  
易經に「王臣  
蹇蹇匪躬之  
故」とあり。

らむ。あに謂はむや、君の忠節にして茲の不測に遭ひ、暴かに異邦の地に薨ぜむとは。嗚呼哀しいかな。君の訃電聞す。皇上震悼、敕して國葬を行はしめ、白叟・黃童・織婦・耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王・大統領・大臣・紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才德・勳業を稱贊す。輿望の盛、振古いまだ君に比すべきものあらざるなり。抑、予はまたこれに因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、即ち宜しく舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに務め、以

匪以報公  
云々  
八大家文卷二  
十六、蘇東坡  
代三省祭司馬  
丞相文」中に  
在り。

て君の志を紹ぐべし。古人云ふ「匪以報公、維以報國。」  
死者復生、信我此言。庶はくは君をして瞑せしむるを  
得む。嗚呼哀しいかな。

九 木曾の奇勝

須原  
信州の木曾街  
道に添ふ驛、  
今は大桑村と  
いふ。福島町  
へ六里。

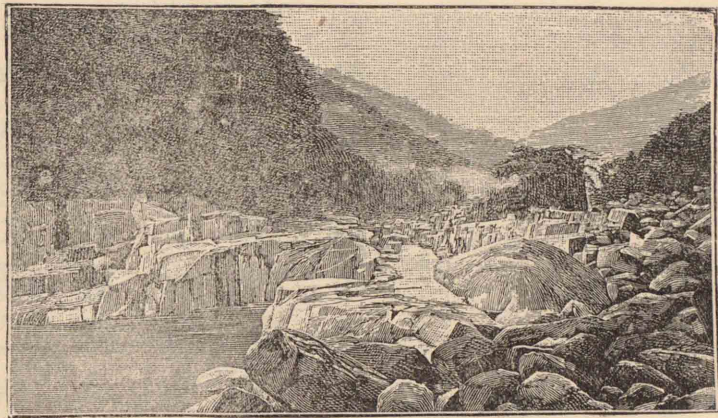
中央線のいまだ開通せざりし時の事なり。歩み疲  
れて須原驛に着きしは、夜の九時頃なりしが、山中の  
荒驛は早くも更けて、冷露聲なく、玉兔徐かに轉ずる  
良夜も、更に賞する人なく、旅亭は既に戸を閉ぢたる  
もの多かりき。わが宿りたる室は恰も木曾川の流

に沿ひて、水聲近く枕に通へり。

翌朝、名物の花漬一箱二箱を買ひて、旅亭を出づ。旭  
未だ昇らず、曉露の繁きこと雨の如し。霧は次第に  
東山より霽れて、未だ寢覺に到らざるに、日影は早く  
も對岸の山の半腹に及びぬ。空氣は極めて清澄に  
して、その中に言ふべからざる秋の静けさと淋しさ  
とを交へたり。木曾川の溪流よりは朝の水煙盛ん  
に升りて、水聲の潔きこと人世のものとしも覺えず。  
寢覺の床の名は、かねて耳に熟せるところ、路傍にそ  
の標柱の立てるを認めて、直ちに路を求めてこれに

寢覺の床  
須原より二里  
半ほどあり。

赴く。臨川寺の庭に踞して獨り徐かに下瞰するに、



寢 覺 の 床

水はあくまで碧に、岩はあくまで奇に、その間に松面白く點綴せられたるは、更に畫圖の如き趣を添へたり。雖僧あり、寺の縁起を説けるが、溪に下るべき路あるを指點して、吾を案内せんといふ。乃ち共に細徑を竹林の中に求め、石に縋り岩に凭りて、辛う

じて溪に達す。

溪は急流・危巖相交れる勝地にして、岩石の奇なるものを屏風岩・硯岩・烏帽子岩・蓮華岩・釣舟岩等とす。その水の來るや、沈々として聲無く、その色の深碧にして急駛せる、そゞろにわが心を惹きぬ。岩石の中央に一小祠あり、稱して浦島太郎が綸を垂れたる古跡といふ。岩上に踞して四顧すること多時、興の盡くるに及びて、もと來し路を求め、再び木曾川の流に沿ふ。

上松  
須原より三

上松驛は、木曾山中、福島に次げる邑にして、その繁華

里、寢覺より  
半里ほどあ  
福島  
木曾街道中第  
一の町。上松  
より二里半ば  
かり。  
中津川  
美濃國惠那郡  
にあり。今は  
中津町とい  
ふ。

は中津川以北未だ曾て見ざるところ、街衢また整頓せり。駒が嶽に登る人は多くこの地よりするを以て、夏時は白衣の行者踵を接し、旅亭は客を以て填ると聞く。  
上松を過ぐれば、一度離れし木曾川は、再び來りて路傍を洗ひ、激湍水珠を飛ばし、奇岩水中に横たはる。兩岸の山また漸く迫り、棧に至りて更に有名なる一大奇溪を現出し來る。  
木曾の棧は多く古歌にもよまれ、岨高く、溪深く、路もなきところに細き棧架け渡して、旅人の目くるめき

慶安元年  
徳川家光の  
時、(二二〇〇)

寛保元年  
徳川吉宗の  
時、(二二〇二)

て行き艱むところなりきと聞くに、慶安元年石を疊み、土を盛りて、危さもやゝ薄らぎぬといふ。されど「かけはしや命をからむ蔦かづら」と芭蕉がよみたるを思へば、尙意を用ひずば、千尋の深谷に墜つべき虞もありしが如くなるを、寛保元年、更に道路を修築してより、古棧跡なくして、溪またかくの如く淺く平かになりたること、吾は古今の變遷に驚かざる能はず。吾は棧の名の甚だ高きに似ず、その實のこれに副はざるを覺えぬ。されど風景としてはさして悪しといふにてもなく、見ん人の心々にて、寢覺などよりも

すぐれたりと思ふもあるなるべし。溪は長さ二町ばかり、上流より弧形を爲して流れ來りたるが、その弓の中央に當りたらんともおぼしきあたり、最も深潭の趣に富み、溪樹の翳鬱としてその上に生ひ茂れる、また捨つべきものとしも覺えず。その深潭に臨みて瀟洒なる一軒の茶亭あり。名物あんころ餅は旅客の大方は憩ひて味ふところ、又紅葉の頃になれば、來り遊びてこの亭に一日を暮すもの甚だ多しといふ。

(田山花袋草枕による)

一〇 旅ごゝろ

島崎藤村

響りんくゝ音りんくゝ	打振り打振る鈴高く
馬は蹄をふみしめて	故郷の山を出づる時
そのかぐるなる鬣は	涼しき風のふき亂り
その紫の雙の眼は	青雲とほく望むかな
えだの緑に袖觸れつ	あやしき鞍に跨りて
馬上に謠ふ一ふしは	げにや遊子の旅の情

ああ幼くて國を出て	ひがしの磯べ西の濱
偕も繫がぬ舟のごと	ゆめ長きこと二十年

偶々今年かへり來て	昔懐へばふるさとや
陰を岡邊に尋ぬれば	松柏すでに折れ摧け
徑を川べに求むれば	野草は深く荒れにけり
菊は心をおどろかし	蘭は思をいたましむ
高きに登り草を藉き	惆悵として眺むれば
檜原に迷ふ雲落ちて	涙流れてかぎりなし
去ねくかゝる古里は	再びいふにたらずかし
噫よしさらば今日よりは	日行き風吹き彩雲の

あやに鬩く彼方をも	白波たかく八百潮の
湧立ち騒ぐ彼方をも	彼處の岡もこの山も
いづれ心の宿とせば	繁れる谷の野葡萄に
秋の實りはとるが儘	深き林のもみぢ葉に
秋の光は履むがまゝ	
響りんく音りんく	打振り打振る鈴高く
馬はかうべを回して	雲にいなき勇む時
かへりみすれば古里の	

檜原は目にも見えにけるかな 落梅集



長井  
三浦半島の西岸にある小港。

和田義盛  
頼朝の臣。

三浦  
代々相模の三浦に住め、豪族。和田義盛も此の一族なり。

一一 三浦半島 川上眉山

酔うて長井<sup>\*</sup>を出でたるをいつとも覺えず。端山繁山さりとも淺けれど、樹の閑隠れの茅が軒端に竈の烟の立昇れる方を、むかし和田<sup>\*</sup>の義盛が生れし處ぞと聞きて、丸三つ引の旗風こゝらわたり野をも山をもち靡かせたる<sup>\*</sup>三浦の一黨が鎧爽かなりし當時を思ふに、村老既に記せず、行人更に顧みもせて行過ぐる山田の畔に、鳴一羽ちよろ／＼駈けありく風情またあはれなり。古人こゝにあり、われ今こゝに

あり。勿々七百年、縱令其の人々は立つて乾坤の上に挺んずべき大人物ならざりしにせよ、今將こゝに來り多少の感慨なき事を得んや。傍への一つ松に近寄れば、鳴驚きて飛ぶ。四面寂たり、行脚の僧一人、遠く山越しに行くを見る、佗しかりき。既にして行く／＼又海を見る、日は早く暮れんとす。堤防長く練絹の如き波を限れる水の江の際に出づ。島あり、波島といふ。右に荒崎を望み、左に黒崎を指す。夕日を洗ふ沖つ白波、一簇しげき磯松の水に躍つて空に飛べる、墨色太だ秀でたり。舟もなし、鳥もなし、臙

行暮れて云々

行暮れて木の  
下陰を宿とせ  
ば花や今宵の  
主なるらん。

(忠度)

くたびれて宿  
かる頃や藤の  
花(芭蕉)

三崎

三浦半島南端  
の町。

脂を流す雲と波と、それも暫し、日は西に名残の色を  
とどめて忽ちにして水のあなたに入る。  
行暮れて宿かる頃や花の香を探るべき時にも處に  
もあらねば、道端に大根積みかけて明日は房州に送  
らんとぞ立働ける男に問うて、外に宿をければ止む  
なくいぶせき家に泊る。主人は三崎に魚を求めて  
未だ歸り來らず。酒待つ程に名ばかりの庭に出づ  
れば、暮煙近く島根を包みて水の色心ゆくばかり美  
しきに、家に舟ありやと聞けばありといふ。名は何  
とか云ひけん、家の子を召寄せて船装ひさす。 艦拍

癸巳の歳

明治二十六年

(三五五)

清見瀉

駿河國清水港  
邊の海。

子靜かに聽て漕出づる波の上の心又なべてならず。  
煙波縹渺として近きは黒く遠きは白く、漁村の燈火  
二つ三つ松の樹の間にきらめけるあたり、炊烟一朶  
の雲を吐きて、稍見え初むる星屑のそれも亦よし。  
船は搖々として浪を分けて行く。  
思ひぞ出づる癸巳の歳、日に清見瀉に船を浮べて山  
と水と酒と月とに明くるを忘れたる事もありける  
が、歲月流るゝが如し、我に馴聞えたる彼の酒好む老  
漁夫將何となりけん。今も猶我が與へたる盃を啣  
みぬるや、はた死にけるにや。東西幾十里、此の星同

興津  
東海道線の一  
驛。駿河國に  
在り。

じく其の家をも照せどもと思へども甲斐なし。人の心の嬉しさよ。其の歳七月、我が吾妻に歸らんとするを送りて、涙を含んで興津の停車場に立ちける時、目をしばたゝきて、且那樣、命があつたら復お目にかゝりませう。私は取る年ぢや。これが永のお別れになるかも知れない。」と、岩の如き身を泣崩しける哀れさに、押して再會を約しけるが、汽車すでに發するに彼をほ去らず、走り來りて、且那樣、まめで御座れ。」と、其の聲今あるがごとし。艦聲俄かに聞くに堪へず。急に船を漕戻させて宿に歸る。老漁夫をほ念

沼津  
東海道線の一  
驛。駿河にあ  
り。

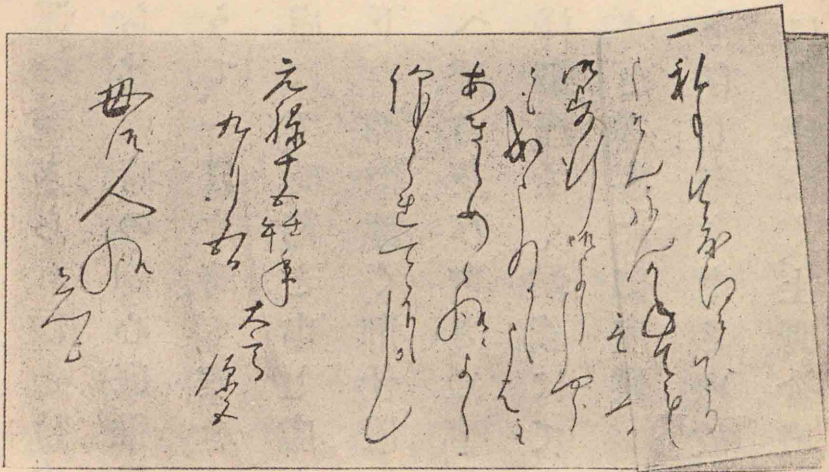
頭を去らず。酒を飲んで愁を消するに、愁更に長し。あゝ、彼一介の舟師ながら、深き所縁もなき我を動かす事斯くの如きは抑、また何の故ぞ。原頭人日に墳墓を築く、彼をほ健かなりや。去年沼津に赴きける時は事多くして行くを果さず、此の度こそは彼が家を叩きて、笑ふ時は赤兒の如く、奮ふ時は野牛の如き彼に、再び遇はんかなと盃を捨て、眠る。夢は我を彼の浦に載せざりき。(ふところ日記)

一一 永訣狀

大高源五

一私事、今度江戸へくだり申候存念、豫ても御物語り申上候通り、一筋に殿様御憤を存じ奉り、御家の御恥辱を雪ぎ申度一筋に御座候。且は侍の道をも立て、忠の爲命を捨て、先祖の名をも顯し申度御座候。勿論大勢の御家來にて御座候へば、如何程も御厚恩の侍も御座候處、さしての御懇意にも遊ばし下されざる人並の私儀にて御座候へば、此の節大抵に忠をも存じ、存へ候うて、そもじ様御存命の間は御養育仕り罷在候うても、世の謗もあるまじき吾等にて御座候

御尊顔云々  
源五、淺野長矩に事へて中  
小姓となり、  
膳番元方・金奉行・腰物  
等を兼ねたり。



大高源五筆蹟

へども、御側近き御奉公相勤め、御尊顔拜し奉り候朝暮の儀、今以て片時も忘れ奉らず候。誠に大切なる御身を捨てさせられ、忘れ難き御家をも思召し離され、御鬱憤遂げられ候はむと思召し詰められ候相手を討損ぜられ、剩へ淺ましき御生害遂げられ候段、御

運の盡きられ候とは申しながら、無念至極恐れながら其の時の御心底推量り奉り候へば、骨髓に徹り候うて、一日片時も安き心御座なく候。されども御短慮にて、時節と申し處と申し、一方ならぬ不調法故、天下の御憤深く、御仕置に仰せ付けられ候事に御座候へば、力及び申さぬ事、全く天下へ御恨み申上ぐべき様御座なく候義にて御座候故、御城は子細なく差上げたる事に御座候。是天下に對し奉り候うて、異儀を存じ奉り申さぬ故にて御座候。併し殿様御亂心に御座なく、上野介殿に御趣意御座候由にて、御切付

上野介  
吉良義央

大學  
淺野長矩の弟  
長廣

けなされたる事にて候へば、其の人は正しく敵にて候。主人の命を捨てられ候程の御憤御座候讐を安穩に差置き申すべき様、昔より唐土我が朝共に武士の道にあらぬ事にて候。それ故早速敵の方へとりかけ申すべく候處、大學様御閉門にて候へば、御免なされ候時分、もしや殿様御跡少しにても仰せ付けられ、上野介殿方へも何卒品もつきて、大學様外聞よく世間もあそばし候やうにも罷成候はば、殿様こそ右の通りに候とも、御家は残り申候事にて候。然れば我等出家沙門ともなり、または自害仕候うても憤は

安藝國  
赤穂の名家

休め候はむと、此の節まで口惜しき月日を送り候所に、そのかひなく<sup>\*</sup>安藝國へ御座なされ候。閉門御赦しと申す名ばかりにて御座候。年月過ぎ候はば、何とぞ御世に出でさせられ候事も御座あるべく候はむか。よし左様に御座候とても、此の節にて殿様御跡は絶え申したる事に御座候へば、此の上前後を見合せ申候は、臆病の仕る所、武士の本意ならぬ事にて御座候。此の上にも天下へ御訴訟申上、何とぞ相手へ御手當も下り、大學様にも世間廣く御取立遊ばされ下され候様に、一命にかけて御嘆き申上、是非御取

上之なく候はば、その時は相手方へ取かけ申すべき由、頻に相談の衆も御座候。尤も一理御座候様には候へども、中々左様の徒黨がましき事仕るべき道理と存じ申さず、その上御願ひ申上、御取上御座なきに付、相手へ取かゝり申候段、偏に天下へ御恨み申上候にひとしく御座候。然れば以ての外儀、大學様始め、御一門の方々様までも御爲宜しからぬ事にて候ゆゑ、唯一筋に殿様御憤をはらし奉り候より外の心御座なく候。

一段々右申上候如く、武士の道を立て候うて、御主の

讐を報い申すまでにて、全く天下へ對し奉り、御恨み申上候にても御座なく候。然れども如何なる思召御座候うて、天下へ御恨み申上げたるも同前とて、我共の親妻子へ御祟り御座候とても、力及び申さず候。萬一左様の事になり候はば、かねて仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の如く、尋常に御覺悟なさるべく候。御はやまり候うて、御身を我と御あやまちなされ候ことなど、くれぐれも有るまじき御事にて候まゝ、必ずく、左様に御心得なされ度候。世の常の女の如く、彼此御嘆の色も見えさせられ、愚

我々兄弟  
源五の弟は小  
野寺幸右衛門  
秀富なり。

九十郎  
岡野秀包、源  
五の甥。

におはしまし候はば、いかばかり氣の毒にて、心もひかれ候はむを、さすが常々の御覺悟ほど御座なされ候うて、思召し切り、かへりてけなげなる御勸にも預り候御事、扱々今生の仕合未來の喜、何事かこれに過ぎ申し候はむや。天晴れ我々兄弟は、侍の冥利に叶ひ申したる儀と、淺からぬ本望に存じ奉り候。先々の首尾の程御心に懸けさせらるまじく候。私三十一、幸右衛門二十七、九十郎二十三、孰れも究竟の者どもにて候。容易く本望を遂げ、亡君の御心をやすめ奉り、未來閻魔の金札の土産にそなへ申すべく候ま

、御心安く思召したゞ御息災にて、何事も時節を御待ちなさるべく候。御齡もいたう御傾き、幾程あるまじき御身に、嚙御心細く、便もあらぬ方に、乏しく月日を御凌ぎ遊ばし候はむと存じ奉り候へば、いかばかりか心憂く候へども、その段力及び申さず候。唯幸に御法體の御身にて候へば、此の後いよく、以て佛の御勤のみにて、うさもつらさも御まぎれましまし、未來の事朝夕に御忘れなく、世も穩かに御座候はば、寺へも節々御參り遊ばされたく、一つは御歩行御養生ともなり申すべく候。乳母にもあきらめ候や

うに、よく仰せられたく候。かしこ。

一三 朱舜水と安東省庵 その一

道義の交などいふことは、昔からよくいふ所であるが、朱舜水と安東省庵との閒柄ほど、義理を重んじた師弟の交は多くあるまい。

省庵は柳川藩<sup>\*</sup>の儒者で、舜水を知つたのは、承應二年<sup>\*</sup>舜水が三度目に我が國に來た時からであるが、愈舜水に會つて師弟の約を定めたのは、その最後の長崎渡航の折で、省庵等同志の者が連署して、舜水永住の

柳川藩  
筑後柳川は立  
花侯の城下。  
承應二年  
(三三三)  
四代家綱の時



事を奉行に願つた時のことである。ところが舜水は、永年あちらこちらと流浪の身になつて居たので、最早貯とてもない。そこで省庵は自分の俸祿の半分を舜水に差出したが、舜水は多過ぎて痛み入るといつて受けない。

すると省庵は、私は師匠として先生に事へるのである。古人は師匠を君と父とに並べて居る位であるから、師匠の爲には命もいらぬ筈である。本來ならば年祿を三つに割つて、三分の二を先生に差上げ、三分の一を自分が戴けば、それでよいのである。先

生は素より不義の祿を受けられることはあるまい。併し私が心をこめた半分の祿は、まさか不義の祿でもありませんまい。若し之を受けて下さらなければ、私の眞心を酌んで下さらぬといふものである。」といつて是非にと頼んだ。

けれども舜水は、「どうも夫では心が濟まない。」といつて、受けようとしなない。そこで省庵がいふには、「私こそ、先生よりも豊かな生計をするのが心にすまない。實は全く家ぐるみに差上げた位であるけれども、其では先生が受けられまいと考へたから、半分をさ

し上げることにしたので、私の先生を敬ふのも、名のためではなく、先生の私を愛せられるのも、何も私事ではありますまい。ただ斯學を明かにする爲であるから、是非受けて下さい。」と言を極めていうたので、舜水もそれから省庵の仕送を受けて居た。しかし一方は長崎に居て、一方は柳川に居るのであるから、書面で絶えず音信を通じ、時には柳川から船を乗出して、長崎に出向いて教を受ける位の事で、早一年ばかりになつた。

所が寛文三年に長崎に大火事があつて、市街の大部分が焼けて仕舞つた。舜水も焼き出されて、皓臺寺の軒下に避難したといふ事を聞いて、省庵は取るものも取りあへず、早速立つて長崎に駆けつけた。舜水の爲には全く命がけてある。長崎につくや否や、先生を訪れると、幸ひ藁葺の小舎が出来てゐて、先生の書物や大切な諸什物は、大抵安全であつたので、やつと安心して、藁小舎の中に一緒に泊り込んで、何くれとなく學問の事など相談して、數日で暇を告げた。命がけてやつて來たのであるから、此の數日間は、どの位楽しい事であつたらう。

水戸黃門  
徳川光圀

斯うして居る間に舜水の偉い事や、省庵の命がけて舜水を保護して居る事などが、學者間の美談となつて、舜水の名は早くも水戸黃門の耳にも入り、聞もなく迎へられて愈、江戸の方に發足することになつた。

一四 朱舜水と安東省庵 その二

朱舜水は江戸に行つてからは、水戸黃門の師賓といふ格で、大いに優待された。省庵は今や幾山川を隔てては居るし、又天下の副將軍と仰がれる水戸黃門の師賓であるから、寒暑を問ふやうな書面で、度々先

生の手敷を煩はしても濟まぬといふ所から、遠慮して一年に一度位しか音づれをしなかつたが、舜水の方では、これまで眞の骨肉も及ばぬ程の親切を盡してくれた省庵の事を、どうして忘れよう。黃門に大切がられるやうな境遇になつて見ると、何かにつけて省庵のことを思ひ出すことが増すばかりである。そこで時々金子や、拜領の衣服や、反物などを送つてよこしたが、省庵は金子を返して反物だけを受取つた。そしてその心持を有體に舜水に申し送つた。すると舜水は中々黙つて居ない。

「先年始めて逢つた時から、自分の祿を半分にして拙者に仕送りをされた。これは全く拙者を、道義を守る者と見られたからであらう。足下はそれを忘れられてもそれでよからうが、しかし拙者がそれを忘れたとあつては、はや人でないといふことになる。足下は自分ばかり高潔な行をしたからといつて、濟むものではあるまい。また折角送つて遣つたものを、返してよこすのが高潔といふ譯でもあるまい。」といつて、物の遣取にも、中々に義理の穿鑿が喧しかつたが、省庵は論語にある原憲孔子の門人、清貧を樂しむ。か何かの事をひいて、金

子だけはどうしても受け難いといふ譯を申し送つた。そこで舜水も、省庵が志の動かす可からざるを見て、それからは、金子の代りに絹帛を送ることにした。

なほ、この金子の送り返しに對する詰問狀ともいふべき書狀の終に、舜水はこんな事を書いて居る、先日、水戸黄門が御自分で調理された膳部を頂戴した。同じ日に、或大名からも珍しい禽を送られた。そして或學者の御典醫からも見事な着を貰つた。餘の人ならば、どんなに嬉しい事であつたらう。しかし

拙者は、こんな時には箸のつけやうもなかつたのである。門人が怪しんで問うてくれたが、拙者は唯別に譯もない。といつて答へて置いた。しかし雨が降つたり、風が吹いたりする日には、屹度足下がいま頃はどろして居るであらうかと思ひ、御馳走や何かになつた時にも、屹度こんな御馳走を足下にも食べさせたいものであると思つては、足下を思ひ出すのであるが、西の極と東の空とに別れて居るので、どうすることも出来ない。ただ懐かしくて堪らない云々。二人の情誼がどの位であつたか、これを見ると察せ

られる。(朱舜水に據る)

蘇武

漢武帝の時匈奴に使し、其の地に捕虜となる。  
匈奴 蒙古地方の遊牧民。

一五 蘇武

坪内逍遙

風颯々のあきふけて	日をかさねたる旅衣
重き君命いただきて	遠く匈奴の國に入る。
野邊の草木や鳥の聲	聞く物の音も見る色も
何れか夷の物ならぬ	思へば遠く來つる哉
流れゆく水音たてゝ	胸にうれへの波高し
故郷母あり雁鳴きて	老の寢覺やいかならん
よしやいく夜の草枕	旅寐の空に結ぶとも

國家の爲に盡すべし 君命おもく身は輕し  
かりと覺悟は定まりぬ 使命つぶさに傳へつつ



武蘇筆邦雅

匈奴の王に面接し 蘇武は國書を呈しけり  
元より非道の王なれば 國書の旨意は聽かざれど

單身敵地に使ひせし	蘇武が勇氣を惜みつゝ
ある時蘇武を召寄せて	降り仕へよしかあらば
おもく汝を用ひんと	説諭せども可かざれば
國王大いに怒をなし	蘇武を捕へて荒山の
いはやの中に幽閉し	食を與へて苦しめぬ
頃しも北風雪を吹き	寒さ膚をつんざきぬ
飢うれば枯草を雪に和し	命をつなぐ料となす
日數経れども死せざれば	夷等怪しみかつ怖れ
此度は蘇武を野に移し	羊の群をまもらせて
雄羊孕むことあらば	放免せんとあざけりぬ

覺悟はしても無念さに 眠られぬ夜も幾度か  
 一夜雲なく月すみて 秋も最中の空のいろ  
 切てはかくて在る事をと 雁に託せし筆のあと  
 かくて春去り夏來り、 また秋の風ふゆの霜  
 落葉々々の重なりて 十有九年ゆめの閒や  
 老いて屈せぬ忠節を 天助けてか不思議にも  
 雁の使のかひありて 樂しき便りぞ聞えける  
 國と國との和議成りて 蘇武は赦され歸りしが  
 立出でし時の黒髪は いつしか雪とぞなれりける

相阪關

近江國滋賀郡

鳴海瀉

尾張國愛知郡。今は全く陸地となる。

浮島が原

駿河國駿東郡

愛鷹山の裾なる須戸沼附近

の原野。

鹽竈

陸前國宮城郡

にあり。

象潟

羽後國由利郡

象潟町附近の海岸。

佐野の舟橋

上野國羣馬郡

佐野村烏川の渡。

仁安三年

皇紀一八二八年。

高倉天皇の時。

一六 白峯の陵

上田 秋成

相阪の關守に許されてより、秋來し山のみぢ葉見  
 すごし難く、濱千鳥のあと踏みつくる鳴海瀉、富士の  
 高根の煙、浮島が原、清見が關、大磯、小磯の浦々、むらさ  
 き匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の  
 蟹が苦屋、佐野の舟橋、木曾のかけ橋、心のとどまらぬ  
 方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三  
 年の秋は、葭がちる難波を経て、須磨、明石の浦吹く風  
 を身にしめつゝも、行きくゝて、讚岐の眞尾坂の林と  
 いふにしばらく筈をとどむ。草枕遙けき旅路いた

白峯  
讃岐國綾歌郡  
松山村。  
新院  
崇徳上皇。

はりにもあらで、観念修行の便りとせし庵なりけり。  
この里近き白峯といふ所にこそ、新院の陵はあれと  
聞きて、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登  
る。松柏は奥深く茂り合ひて、青雲のたなびく日す  
ら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽といふけはしき嶺  
うしろに峙ちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、  
まのあたりもおぼつかなき心ちせらる。木立わづ  
かにすきたる所に、土高く積みたるが上に、石を三か  
さねに疊みなしたるが、うばらかづらに埋れてうら  
悲しきを、これなむ陵よと思へば、心もかきくらまさ

れて、更に夢現とも分きがたし。

げにまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に大  
政きこしめされ給ふを、百のつかさ人は、かく賢き君  
ぞとて、御言かしこみて仕へまつりき。近衛院に譲  
りましし後も、藐姑射の山の玉の林をしめさせ給ひ  
しに、思ひきや、麋鹿の通ふ路のみ見えて、まうづる人  
もなき深山のおどろの下に、神がくれ給はむとは。  
萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふも  
の、おそろしくも添ひたてまつりて、罪をのがれさ  
せ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつつけて、涙



わき出づるが如し。夜もすがら供養し奉らばやと、  
陵の前の平なる石の上に座を占めて、經文靜かに誦  
しつゝも、かつ歌詠みてたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを

かたなく君はなりましにけり

尙どころ怠らず供養す。露いかばかり袂に深かり  
けむ。日は入りしほどに、山深き夜のさま常ならで、  
石の牀、木の葉の衾いとさむく、神清み、骨冷えて、物と  
はなしにすさまじき心ちせらる。（雨月物語）

一七 島の爲朝

瀧澤馬琴

爲朝は日毎に物を送り來る、島婦等にも親しくもの  
いひ給ふ程に、彼も亦その徳を慕ひて、をりく乾れ  
たる魚、束ねたる薪などもて來りて、かはるく進ら  
せけり。ある日一人の島婦が進らせし魚を食べ給  
ふに、その味甚だ美し。「こはよくも漬けたる鮓かな。」  
と賞め給へば、島婦がいふやう、「これはわらはが漬け  
たるにはあらず。沖に鵜ミヤコといふ鳥ありて、魚を取り  
て餌とするに、數多魚をとれる時は、食み殘せるを岩  
の挾間などへ貯へ置くに、自ら浪に洗はれ潮に浸り

てかくの如し。伊豆の國人はこれを鵜鮓といふよ  
しなれど、いと稀なる物にて侍り」といふ。

木綿の山  
速見郡。由布  
嶽。  
保元二年  
皇紀一八一七  
年。後白河天  
皇の時。

爲朝事のもとを聞き給ひて、昔われ豊後國にありし  
とき、木綿の山邊なる紀平治といふものを訪ひける  
に、猴酒をもてその日のもてなしとせられしが、今又  
こゝに流されてこの饋を得たり。猴酒鵜鮓は世に  
山海一對の珍味と稱す。さてもわれながら口には  
果報ありけり」と打笑ひ給へば、島婦もいとうれしみ  
つゝおのが家路に歸りけり。  
かくて今年もや、暮れて、明くれば、保元二つの年の

春も彌生のころになりつ。もとよりこの島は去年  
の冬さへ暖かにて、雪の降ることもなかりし程に、春  
は殊さら住みよかれど、葦鹿鳴く浦の苦屋に風をい  
たみ、岩うつ浪に夢を破られ、寢覺わびしき曉に鶴の  
鳴聲聞えしかば、爲朝枕を欬て給ひて、奇なるかな、こ  
の島に獸は牛・馬・猫・鼠の外はなく、鳥は雁・鴨さては尋  
常なる小鳥やうのもののみぞ渡り來ると思ひしに、  
今鳴くものは鶴にやあらむ。かゝる鳥も又稀には  
渡るにこそ」とひとりごち、やがて起出でて見給ふに、  
果して一隻の鶴飄々然として飛來り、ほとり近う下

りたつとき、物の響あるに心づきて眼をとめてみそ  
 なはするに、足に附けたる黄金の牌なりければ、泫然  
 として懷舊にたへ給はず、是なむ先つ年われ琉球國  
 より得てかへり、鳥羽上皇に獻りしを又放させ給ひ  
 しと聞きたるが、われに往返する事既に三たびに及  
 び、今又こゝに來れるは必ず深き故あらむ」とひとり  
 ごち搔寄せつゝ、彼の牌を見給へば、牌の背に墨くろ  
 く、

眠柳閑花遶水亭 仙禽再去還東溟

逢春便覺孤霞迥 清影何時照我庭

と寫したりしかば、打返して讀み畢り、しばし思案し  
 てのたまふやう、親兄弟はいふも更なり、妻子眷屬皆  
 死亡して、今は爲朝を思はむもの世にはあらじと覺  
 えしに、こは何人の筆ならむ。よしその人は誰にも  
 あれ、返しせむ」とて、彼の牌に水を沃ぎかけ、袖もてし  
 かと押し給へば、文字は左に見えながら、衣の上にぞ  
 うつりける。やがて禿びたる筆を取りいで、この牌  
 に、

いにしへのためしも思ひいづの海

こととふ鳥の跡を見るかな

と書きつけ給へば、鶴は忽ち飛揚り、往方も知らずな  
りにけり。(説梅弓張月)

一八 榊原康政 その一 新井白石

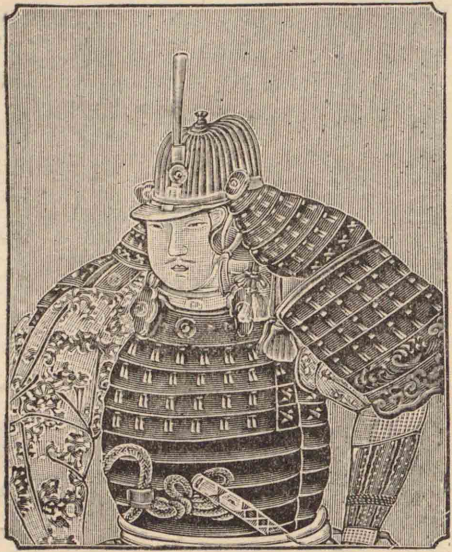
慶長三年  
皇紀二二五八  
年。  
奉行  
人  
前田玄以。長  
束正盛。淺野  
長政。石田三  
成。増田長盛。  
伏見の御館  
徳川の居城。

慶長三年の秋太閤薨じ給ひ、明くれば四年の正月、大  
阪の奉行<sup>\*</sup>人等徳川殿を失ひ、参らせむと謀り、竊かに  
軍兵を催し、伏見<sup>\*</sup>の御館を襲はむとす。この由既に  
披露して、徳川殿に馳参つて、御館を守護せし大名も  
少からず。  
康政このほど東國より上るとて、道にてかくと聞き、

勢多  
瀬田川口にあ  
る町。

大津  
琵琶湖畔の市。  
山科  
東山と逢阪山  
との間にある  
一劃の地。  
醍醐  
山科の附近。  
狼谷  
伏見山の北に  
在る谷、大龜  
谷といふ。

夜を日に繼ぎて馳する程に、近江の國勢<sup>\*</sup>多に至り、徳  
川殿御恙なしと聞きて、此處に新關を立てて、往來の



榊原康政

旅人を止む。徳川殿の  
軍勢既に勢多まで馳上  
りて、雲霞の如く陣取る  
と、大阪に聞えしかば、た  
やすり寄せも來らず。  
康政勢多に留ること三

日、同月二十八日の夕暮に關を開く。この間、諸國よ  
り來り集つたる旅人、ただ一時に大津・山科や醍醐・狼

谷を経て京・伏見に馳上る。これを見る人、あな夥しの東國の勢や、何萬騎あらむ」といふもあり。また、秀忠中納言の、多勢を引いて上り給ひし。などいふ程に、大阪の人々、いよく、心おくれして、終に和ぎけり。

奥の景勝  
陸奥の上杉景勝。  
中納言殿  
徳川秀忠。

この夕、康政大童なるまゝにて馳参りしかば、徳川殿大いに悦ばせ給ひ、自ら打鮑とつて給ひけり。同じき五年の秋、奥の景勝御追討の時、康政中納言殿の先陣を打つて下る。かかる所に、上方にも軍起りぬと聞えてければ、まづ此處の軍をば止め、引返して上方へ向はせ給ふべきにて、中納言殿は、山道を打つ

眞田  
安房守昌幸。  
上田の城  
信濃國小縣郡  
上田町。

小諸の城  
同國佐久郡小諸町。

て上らせ給ふに、信濃の眞田が、上田の城にたて籠つて、御勢を遮らむとす。本多佐渡守正信、安房守が勢にて、城を出て戦はむこと叶ふべからず。唯打棄てて、片時も早く御上りあつて、海道の軍のやうを聞し召し合せらるべし」と申しけるに、大番の人々、はしたなく城の兵と行逢ひて軍し出し、城既に落つべかりしを、佐渡守制し止めて、小諸の城に御陣移させ参らせ、軍せし輩を罪科に處す。これ御下知を待たずして軍せし故なりけり。ここより、閑道を経て上らせ給ふ。正信が計らひにて、直路は敵に近しとて避け

られし故とぞ申しける。康政は眞田が軍せむ様、いかほどの事かあらむ、打出てなば蹴散らして、その城を踏破つてくれむずものをとて、おのが手勢ばかりにて、城近く押して通るに、昌幸敢て止めむともせず。關が原の軍事終りぬと、道にて聞し召し、中納言殿、殊の外憤らせ給ひて、御馬を早められし程に、近江の國草津草津 栗太郡にあ  
り。東山道と  
東海道との交  
會。の宿にて、徳川殿に参りあひ給ふ。

一九 榊原康政 その二

されども、大御所大御所  
家康。内々御氣色宜しからざる事あつて、

三日を過ぐるまで御對面ましまさず。こは如何なる事ぞと、御家人等驚きあへり。まして、山道の御供にさぶらひし輩、大きに恐れをのゝく。康政夜に入つて、徳川殿の御前に参り申すやう、こたび中納言殿御不審蒙らせ給ふこと、康政等が罪科最も輕かるべからず。但し、風聞の及ぶ所、中納言殿、上田の城を攻落し給はず、又押しても御通りなく、殊に海道の合戦にもあはせ給はぬ事を、御不審ありと承り候ひぬ。若しこの條に候はむには、恐ある申し事に候へども、殿の御過なきにしもあらず。抑、殿は、今月朔日に、江

清洲の城  
西春日井郡清洲町。

戸を御首途あつて、同十一日尾張の國清洲の城に入らせ給ひ、僅かに二日を過ぎて、美濃國へ御陣を進められ、十五日に至つて、御合戦事畢つて候。誠に御父子一所に、三成等を御誅伐あらむと思し召されなば、かねて軍の御首途あらむ期をも告げさせ給ひ、また海道よりも、御使を參らせられ、山道の御勢を催さるべき事ならずや。また今暫く清洲の城に御陣を止められ、山道の御勢を待たせ給ふとも、三成等が謀如何程の事か候べきに、など御軍をば急がせ給ひしやらむ。然るに、唯今に至りて、偏に中納言殿の御怠に

のみならせ給ふこと、御不運とこそ申すべけれ」と、憚る所なく白しければ、「さればこそ、八月晦日の日、使を馳せて、明日首途すと告げ、山道の勢も、急ぎ馳上りて軍の手合せよといひつれ」とのたまふ。康政「さん候。その御使、今月七日、小諸の御陣へ來り畢んぬ。それ故にこそ、中納言殿も驚かせ給ひ、道の程御急ぎあつて候ひつれ。常だにも、日本第一の難所と承る木曾の細道を、大雨を冒し、大軍を率ゐて、一日がうちに、十五六里が程を、御馬を進められしかば、馬も人もみな疲れはてて候ひき」と申す。徳川殿「やあ、その使はい

かにかくは遅く参りけるぞ」と、御使を召して御糺問ありしに、「霖雨ふりて、此處彼處水かさ増り、人馬の通ひ絶えて候故に、遅参に及びぬ」と申す。

康政重ねて申しけるは、また上田の城を攻め給はざりしは、古い者共が、強ちに諫め止めまゐらせし故なりき。中納言殿には、攻破つて御通りあるべしと御諛ありしかど、年老いたる輩を附け参らせられし事は、諫をも進め、謀をも獻れとの御事に候。たとひ御心に叶はせ給はぬ事ありとも、我等が諫に従はせ給はむは、大殿の御心に任せらるゝにあらずや」と申し

ける上は、御心にも任せ給はず、されば彼の城を攻めり攻めじの争には日をこそ移し候ひつれ。それ父子の御中にて渡らせ給へば、凡その事の御教訓には、いか程の御勘氣もなど無からざらむ。御年も壯にならせ給ふ御子の、行末は天下の事をも知ろし召さるべきを、弓矢取つての道に、父の御心に叶はせ給はざりしと、人の侮り申さむは、御子の恥辱のみにあらず、父の御身にも、いかでかその嘲を免れさせ給ふべき。これ程の御遠慮ましまさぬこそうたてけれ」と、涙を流し諫め奉れば、徳川殿御心解けて、明くれば九



月二十五日、伏見の御城にて御對面あつて、海道の軍の様を御物語あり、山道の事をも問はせ給ひしかば、中納言殿、自ら御筆を染められ、康政がこの度の志我が家のあらむ限りは、子々孫々に至るまで、忘るゝことあるまじき由の御書を賜はりしとぞ聞えける。

(藩翰譜)

仁和寺

京都市の西北郊御室にあり

石清水

男山八幡

極樂寺・高良

共に男山の麓にある社寺

二〇 仁和寺の法師

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかり

と心得て歸りにけり。

さて、かたへの人にあひて、年頃思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて山までは見ず。とぞ言ひける。少しの事にも、先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならむとする名残とて、各遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるや

りにするを、鼻をおしひらめて、顔を入れて舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。  
しばし奏でて後、抜かむとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打割らむとすれど、たやすく割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ることに限りなし。醫師の許

にさし入りて向ひ居たりけむ有様、さこそはことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」と言へば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらむとも覺えず。

かゝる程に或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなとか生きざらむ。たゞ力を立て、引きたまへ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻

缺けりげながら抜けにけり。辛き命まうけて、久しくやみ居たりけり。(徒然草)

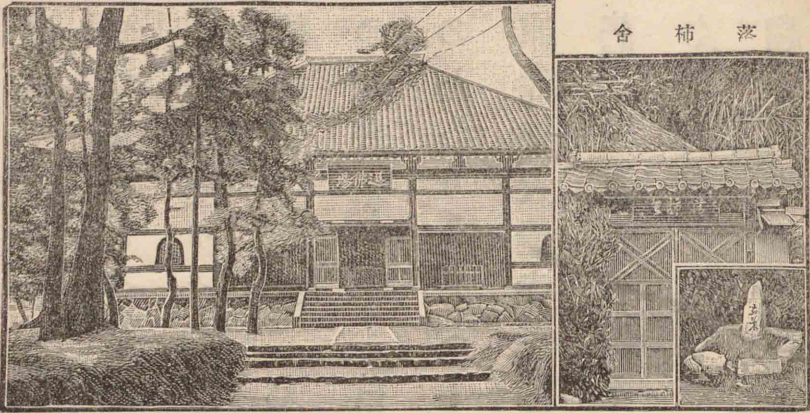
二一 嵯峨のほとり 村山龜齡

嵯峨 京都市の西に在る地。  
僧正遍昭 宇多天皇頃の人。古今集に此の人の名にめててをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人に語るな」と云ふ歌あり。  
西行 鎌倉初期の人。野山も云々

史蹟美と風景美とを併せ盡せる嵯峨のほとりは、げに優しくもうるはしき地なるよ。かの百敷の大宮人が、小松曳若菜摘あるは虫選びなど四季をりくくの遊びごとありし名所。僧正遍昭は女郎花にみとれて馬よりおち、法師西行は御狩の跡をたづねて野山もはてはあせ變りけり」と嘆く。王侯將相は更な

「此の里や嵯峨のみかりの跡ならむ野山もはてはあせ變りけり(山家集)」

臨濟 僧榮西が入宋して傳へたる禪宗の一派。



落柿舎

天龍寺

去來の墓

り、古の詩人文客こゝに塵念を洗ひ、こゝに悶々を遣る。彼等居常、志を得れば即ち曰く、「吾嵯峨に遊ばん」と。志を得ざれば即ち曰く、「我嵯峨に隠れん」と。嵯峨を解せずして京師千年の歴史を知らんとす、洵に誤れりといふべし。

\*臨濟の天龍寺、むかしゆかしき野の宮の古色。「小倉山秋のあ

定家  
姓は藤原、鎌倉初期の歌人。

去來

元祿の俳人。姓は向井。落柿舎は其の住家の名なり。

二尊院

天台宗。本尊は釋迦・阿彌陀の二尊。

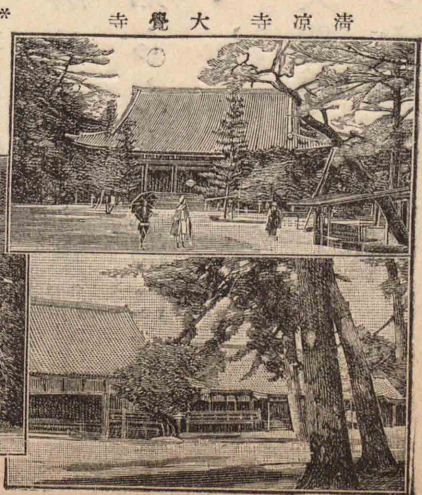
清涼寺

淨土宗。一名釋迦堂。

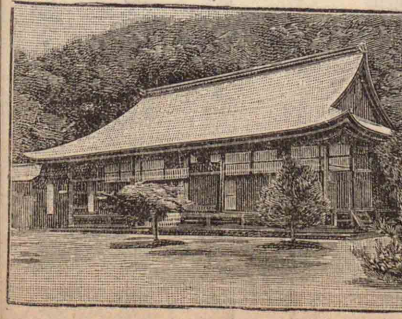
大覺寺

眞言宗。もと嵯峨天皇の離宮。

はれや残らまし、小鹿の妻の  
つれなからずば。と、歌聖定家  
は詠じたりけん常寂光寺の  
縁起やいかに。茅の屋根、松  
の柱、去來を偲ぶ落柿舎もこ  
のあたりなるべし。二尊院や、清  
涼寺や、大覺寺や、四方を顧れば蒼  
茫、綿々たる風懷そも何にか譬へ  
ん。たそがれの車の上の旅の情、  
趨るがまゝに行き往けば、路や



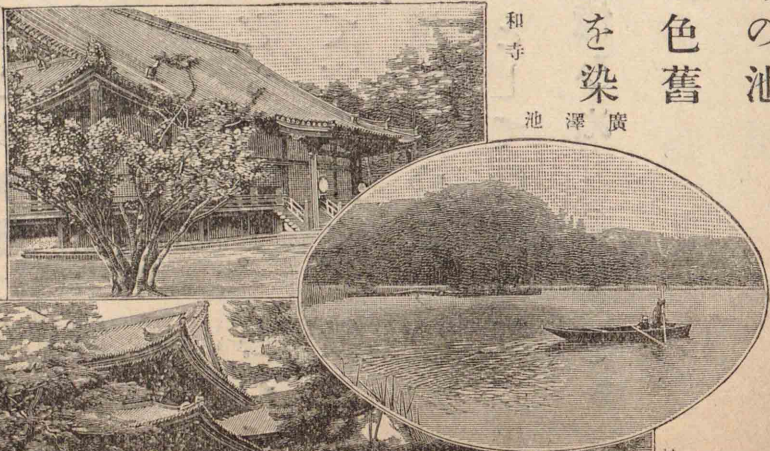
清涼寺大覺寺



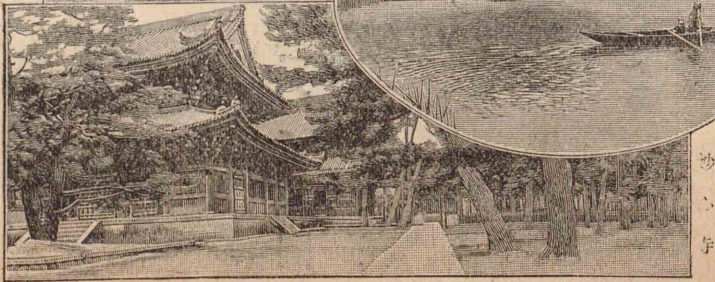
二尊院

池をめぐり  
て  
名月や池をめぐりて夜もすがら(芭蕉)

ひらけて鐘のごとき廣澤の池  
の澗にまよひ出でぬ。水色舊  
に依りて清麗、柳糸縹く衣を染  
めて、一幅春風の繪を展  
くに似たり。湖を以て  
洛西第一。古來觀月の  
勝地として識られしもの、  
俳哲芭蕉は池をめぐりて夜も  
すがら、三位中將維盛の息



廣澤池



維盛寺

御室

京都市外花園村の大字。其處にある仁和寺は宇多法皇の建てられし寺。

花園

京都西北郊の村。其處にある妙心寺は花園法皇開基。

六代丸は、みじかき憂き世をこの水邊に没落の涙を拭ひぬ。指呼しきたれば、嵯峨野の三字、何ぞそれ餘韻の嫋々たるや。  
御室の仁和寺に友を訪へども在らず。去つて花園の妙心寺に賽し、幌を蔽ひて京へ急ぐ。微月、雲に在り、満天皆露。隱々として遠く聞ゆるもの、是は彼の寺の鐘の聲たり。風蕭々として行人唯五六、坐る昔の「さかのほ、とり」のことを憶ひぬ。(平家詩史)

二二 元祿調

芭蕉

姓は松尾、伊賀上野の人、江戸に出てて俳名を揚ぐ。

其角

姓は榎本、後寶井と稱す。江戸の人、芭蕉の門人。

嵐雪

姓は服部、淡路の人、江戸に出てて芭蕉の門人となる。

去來

芭蕉の門人となり京都にて俳名を揚ぐ。二十一課の註参照。

丈草

姓は内藤、尾張犬山藩の重臣、後芭蕉の門人となり俳

あら海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

塚も動け我が泣く聲は秋の風

芭蕉

夕立や家をめぐりて家鴨なく

其角

名月や疊の上に松のかげ

其角

元日やはれて雀の物がたり

嵐雪

秋風の心動きぬ繩すだれ

嵐雪

木枯の地にも落さぬ時雨かな

去來

應々と云へどたゞくや雪の門

去來

悔云ふ人のとぎれやきりぎりす

丈草

四條から五條の橋や朧月

許六

名を揚ぐ。  
 許六 姓は森川、近江彦根の藩士、江戸に出て芭蕉を師とす。  
 凡兆 加賀の人、芭蕉の門人。  
 支考 姓は各務、美濃の人、芭蕉の門人。  
 杉風 姓は杉山、江戸の人、最も早く芭蕉の門に入りし人。  
 越人 姓は佐分利、熊本の藩士、芭蕉の門人。  
 園女 姓は渡會、伊勢山田の人、芭蕉の門人。

ながくくと川一筋や雪の原  
 雁の聲おぼろくと何百里  
 がつくりとぬけ初むる齒や秋の風  
 山寺に米搗くほどの月夜かな  
 負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな

凡兆  
 支考  
 杉風  
 越人  
 園女

二三 狐塚

此の邊の者で御ざる。某山田を數多持つて御ざる。當年は事の外好う出來て御ざる。さりながら、此の頃は鹿・猿・貉が出て、田を荒らします。太郎冠者を喚出し、山田の番に遣らうと存ずる。やいく、太郎冠者あるか。」太はあ、御前に居ります。」主、汝を喚出す事別の事でない。當年は身共の山田が事の外好う出來た。夫につき此の頃は、鹿・猿が田を荒らす程に、汝は今夜山田へ行て、鳥獸も來たらば逐うて番をせい。」太、畏つて御ざる。私一人で御ざるか。」主

「いや、後程は次郎冠者も見舞に遣らうほどに、先づ行け。」太、心得ました。」主、さりながら、此の内は狐塚の狐が出て化かすと云ふ程に、化かされぬやうにして番をせい。」太、夫はこはいことで御ざる。最早參り

ます。」主「明日早々歸れ。」太「はあ。」主「えい。」太「はあ。」  
太「さてもく、迷惑なと言付けられた。夜晝使は  
るゝといふは氣の毒なことぢや。參る程にこれぢ  
や。先づこれに居て番を致さう。」  
主「太郎冠者を山田へ番に遣して御ざる。定めて淋  
しうして居るで御ざらう。次郎冠者を見舞に遣さ  
うと存ずる。やいゝ、次郎冠者あるか。」次「これに  
居りませぬ。」主「汝は太儀ながら山田へ行て、太郎冠者  
が伽をしてやれ。」次「畏つて御ざる。」主「小筒もちと  
持て行け。」

次「心得ました。これは扱迷惑なれども、參らばな  
るまい。主命ぢや。是非に及ばぬ。是は暗うて何  
處やら知れる事で無い。呼ばはつて見よう。ほい  
く。太郎冠者。やい何處に居るぞ。」太「さればこ  
そ、狐が出た。彼は次郎冠者が聲ぢや。好う似せた。  
おのれ、化かさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛を濡ら  
さう。」次「ほいゝく。」太「ほいゝく。此處に居るわ。」  
主「何處に居るぞ。」太「此處に居るわ。やあ、次郎冠者  
か。」次「なかく。頼うだ人が言付けられて、伽に來  
たわ。」太「好うこそおりやつたれ。扱もく、好う化

けた。其の儘の次郎冠者、々々々々。捕へて縛つてやらう。やい、次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が逐りたれば、此方の山へ、くわらくくと逃げたわ。」次「それは出かした。」太「どつこへ、やる事では無いぞ。」次「これは何とするぞ。」太「何とするとは狐め、化かさるゝ事では無いぞ。」次「己は次郎冠者、々々々々。」太「何の次郎冠者。汝縛つて此の柱に括つて置いて。狐殿よい姿すがたの。汝今に皮を剥いでくれろぞ。」

主「太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣して御ざる。心もと無い御ざる。見に参らうと存ずる。ほいく、太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほいく。」太「是は如何なこと。又狐が出居つた。彼は頼うだ人の聲ぢや。此も捕へてやらう。ほいく。」主「ほいく、何處に居るぞ。」太「此處に居ます。」主「やあ、これに居るか。淋しからうと思つて見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。」太「なか〜。彼處に居ます。是は如何な事、此も好う化けた。其の儘頼うだ人ぢや。縛つてくれう。かつきめ、汝騙さるゝ事では無いぞ。主「是は何とするぞ、身共ぢや。」太「汝も好う化けた。」



先づ縛つて此の大木に括り付けて置いて、致し様がある。狐は松葉で燻べると厭がると云ふ。燻べてやらう。さあ、尾を出せ。鳴け。」 主「汝太郎冠者め。主を此の様にして罰當りめ。」 太「何を狐殿いはる。」 さらば次郎冠者狐も燻べてやらう。さあさあ、鳴け。」 こんくといへ。」 次「是は何とする、何とする。」 太「ありやく。厭がるわく。」 汝二匹ながら鎌を取つて来て皮を剥いでくれうぞ、待つて居れ。よう化かさうと思つたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて来るぞ。」

主「扱もく、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。」 次「さ様で御ざる。こなたは頼うだ御方か。」 主「なかく。汝も縛り居つたか。」 次「いかにも、縛られました。」 主「何と鎌を取つて来る。殺さうと云ひ居つたが、何と其方が繩は解かれぬか。」 次「それば、どうやら繩が解けさうに御ざる。解けますぞく。さあ解きました。どれく、こなたも解きませう。扱もく、憎い奴で御ざる。何としたもので御ざらう。」 主「いやく。此の態では側へ寄るまい程に、元の様にして居て、これへ來たらば捕へて彼奴をゆり

に上げう。」次「一段と好う御ざらう。」主「さあ、これに寄つて、元の様にして居よ。」次「心得ました。」太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で打殺してくれう。さあ、今打殺すぞく。」主「そりや、次郎冠者。」次「心得ました。」主「汝は憎い奴の。次郎冠者足を持って。」次「心得ました。」主「さあ、ゆりに上げく。」太「是は何と狐共するぞ。」主「狐とはまだ、汝めは憎い奴の。縛り居つたがよいか。是がよいか。」太「扱は頼うだ人、次郎冠者か。許させられ。眞平、御許されく。」二人「何處へうせる。やるまいぞく。」(續狂言記)

二四 花月草紙抄

松平定信

一 櫻の花

無しときけば、有りといはまほしく、あしといふをばよしと事かへていはむこそ、いとねぢけたることなれ。さくらてふ花はわが國のものなるを、からくににもありとて、さまぐためしなどひきつくれど、櫻かいたるもろこしの晝もなく、かまへりとおもふからうたもなければ、なしとこそいふべけれ。

いでやさくらといはでしもはなとだにいへば、こと  
 木にはまぎれぬものを。ほのくとあけ行くやま  
 ぎは、雪か雲かとはかり咲き満ちたるも、かすみこめ  
 たるゆふまぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝ  
 にのみくれ残すけしきなどいふは浅かりけり。ま  
 いてうてなののびやかなれば、近劣りするなどいふ  
 は、かの事かへてぎえおふ心にいふことなりかし。  
 風にちりかふも、雨にぬるゝも、遠山に見るも軒ばに  
 むかふも、明ぼのも夕ぐれも、露のひる間も、めかるゝ  
 時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほ

に、花のかたちもゆたけく、匂ひさへもこちたからぬ  
 もあやしきまでにくそおほゆるものなれ。さるを  
 いづこにもありといふはさらなり。曙夕ぐれなど  
 おもしろからむやうにことばそふるは、いまだ深く  
 そめし心にはあらざりけり。すべてことばもてい  
 ひ盡さむと思ふは、いとあさき心かな。

二 かの人は

かの人は雪ほたる<sup>\*</sup>あつめし窓に年をつみて、ふみ見  
 る道に心をつくし侍るなり。されば世の中の事に  
 は、いとりとく侍りといへば、さるこそまことの道ま

雪ほたる云  
 晉の車胤と孫  
 康の故事。

ねぶ人なりけれと、ほめものするものありとや。もとより道まねぶものは、五つの常、五つのみちよりして、人を治め、己ををさむる道まねぶより外のことはない。されば世のことにさとく、今のあたりのみかは、千とせの前つ世のこと、みぬもろこしのむかし今のさまより、さかりおとるふるきざし、人の心のうへより、仕ふる道のくさぐさに至るまでも、明らかなるこそみちまねぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからむ。

三 やまと歌は

やまと歌は云々  
古今集の序に「やまと歌は人の心を種として……力をも入れずして天地を動かす、目に見えぬ鬼神を哀と思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むる歌なり」

やまと歌は、人の心よりあめつち鬼神をも感ぜしむるなどいふ、こは和歌にかぎることにはあらず。ただ一の誠もてこそ、大ぞらをもうごかしつべけれ。漢の高祖の、太子うごかすべきわたくしの御心を、さまぐることわり盡して、人々諫むれども、うけがひ給はず。さるに周勃といふ人が、口にはいひ得ねどもよからぬ事をしれ、ば、そのみことのりをばうけじといひし一言にて、さばかりの御心まどひもはれ給ひしとか。さればよし詞のはなをさかせたりとも

誠のつらぬくにあらざれば、えうなき事なり。まこともつらぬきて、詞の色もそなはりなば、いと人の心をもうごかし、やはらぎつべければ、一やうに實だにあらば、花はなくてもありなむとはいはじ。

四 よつの時の

よつの時のうつり行くけしきこそ、またなくをかしきを、さかざるをりの花をさかせむとし、散るころに散らさじとおもふは、いとくるし。ちれば又こむ年はさきぬべし。いかに心をくるしむとも、霜しろく氷かたきをりに、はちすの咲くべきことわりなし。

されど咲くをまち散るををしむは道なり。散るをもよそにして、こゝろとせぬは道しらぬこころなるべし。

五 事を處するに

事を處するに利害得失に心をつくるもうべなれども、まづそのことの筋をよくみて、さて利害得失をもてらしみるべし。

よにいふ才あるものは、まづわが利害得失はやくみゆれば利につき、害に遠ざからむとのみして、その筋をうしなふなり。たゞ害ありとも、かくすべしとい

ふは、いといたりおもきすぢの事なり。さればその筋のおもきとかるきと、利害のおもきとかるきとをかけ合せても、その筋のかたおもきは、害にあふともその筋にしたがふべし。また才なくして、筋にもくらく、たゞ一筋に心うるものは、すぢのかるきにもおもき害を得て、辭せじとするもありぬべし。才ありても道まねびて明らかなるにあらざれば、かるきをおもしとして、つひに道うしなふものこそおほかめれ。

二五 支那の國民性

徳富猪一郎

文弱的、妥協的、權變的、巧詐的は支那の國民性中、見逃すべからざる特色なり。而して其の最も強點とする所は、受動的抵抗にあり。古往今來支那人との折衝に於て、名に勝つて實に負くる所以は、職として此の作用に由らずんばあらず。

日本人は火の如し、支那人は水の如し。火の性や猛なり、然も久しきを持する能はず。水の性や緩なりされど、混々として盡きざるなり。支那人は事面倒となれば、兎も角も一應承服するなり。されど是た

だ口先のみの承服にして、決して之を實行せざるなり。所謂彼等の十八番なる受動的抵抗は、此よりしてそろく、と發揮し來るなり。たゞ餘りに嚴重に督責すれば、其の場だけは、一寸胡魔化すなり。されど乍ち本の木工阿彌となるなり。如何なる有力なる征服者も、此の作用に對しては、如何ともする能はざるなり。要するに面従腹否とは、此の受動的抵抗を説明するに、最も精當なる言葉なり。一方に受動的抵抗あるかと思へば、他方には體面的虚飾あり。凡そ支那人程一本調子にて參らぬもの

はなし。若し支那人を目して唯慾得打算のみの實利動物とせば、そは餘りに支那人を單純視したるなり。實利と虚榮とは、彼等双肩の荷物なり。其の何れか輕、何れか重、容易に判定すべからず。面子なる語は、上は大總統より、下は苦力に迄通用す。これ實に支那人を支配する法律以上の法律なり。彼等日常の起居動作、經營努力、一として此の面子の觀念に支配せられざるものなし。彼の宋朝の古、富弼が契丹に向つて貢物を輸しつゝ、献納の二字を爭ひたるも此が爲なり。今日生意氣の學生が三等汽

車に乗らずして、二等に乗る亦此が爲なり。  
若し支那人は實利的人種なるが故に、其の面目玉を踏み潰すも差支なしと思ふ者あらば、それは非常なる謬見と云はざるを得ず。實利と虚榮との選擇に就ては、支那人は迷ふべし。されど彼等の虚榮は少くとも實利と同等の價值ありと知らざるべからず。されば支那人に取りては、其の心中に於ては、百も承知し居る事ながら、たゞ其の體面上、相當の文句を並べ苦情を唱ふるが如きは決して珍しき事にあらず。一方に面従腹否の性格を有する支那人は、他方に面

否腹従の性格を有す。而して此の兩個の性格、交互錯綜して、一種不可解なる支那の國民性を構成し來るが如し。

一言にして評すれば、日本人は一旦緩急的なり、支那人は普通尋常的なり。長所此處にあり、短所此處にあり。而して日支兩國人が互に相提携し難き所以或は亦此處に存せざんばあらず。

凡そ既定の順序を實踐し、慣行の事柄を繰り返すには、支那人程調法の者はなきなり。或は稱して生命ある器械と云ふも可なり。支那人の給仕が世界第



一の好給仕たる所以、恐らくは此の盲目的服従、無心  
經的動作に是れ由らむか。

併しながら若し一旦既定の順序が齟齬するあらん  
か、支那人の弱點は、乍ち此處に暴露せらるゝなり。  
彼等は周章し狼狽し、途方に暮れ、進退度を失し、宛も  
時計の針の止まりたるが如く、汽車の脱線したるが  
如く、電話の混線したるが如く、其の常識を失するな  
り。即ち平生有する知識才覺を一切失墜するなり。  
これ支那旅行者が、毎々實驗する所にして、其の事の  
大なると小なるとを問はず、非常の場合には何等の

役にも立たぬものと知るべし。

謂はゆる神智靈覺は、支那人の最も不長所なり。否  
比較的、低級の氣轉さへも餘りに利かぬ者多きなり。  
勿論中には目より入りて、鼻より脱けるが如き、才走  
りたる者もあり。されど要するに彼等の多數は、順  
風快潮の舟師にして、惡風激浪の水夫にあらず。  
戦争は蓋し人事に於て、非常の最なるものなり。支  
那人が戦争に適せざるは、其の平和的人種なるが爲  
のみにあらずして、孫子の所謂善出奇者、無窮如天地  
不竭如江海なる能はざればなり。即ち彼等は練兵

場に於て好兵士たるを得るも、戦場に於て好兵士たる能はざればなり。別言すれば能く常に處して、變に處する能はざればなり。(支那漫遊記)

## 二六 戦争の結果

鹿子木員信

戦争の結果は正義の確定である。蓋し總べての國民は、實に戦争に依りて最も明確にその世界史上文明史上の地位を定める者である、即ち人類の階段を定めるものである。雄健にして勤勉、高貴にして優越せる國民は、此の階段の上に、より高き地歩を占め、

従つてより大なる活動の範圍と、より大なる支配權とを得。之に反し劣等懶惰なる國民は、それに相當する報を受けざるを得ない。かくして戦争は總べての國民の其の時々優劣を定める最も鋭敏なる標準である、總べての國民に其の優越の度に従つてその所と其の階段とを與へる正義の秤である、眠れるを醒し、腐れるを切捨てる神の劍である、人類無限の文明史的向上の健闘に堪へぬ一切の腐敗廢頽衰亡の國民を振ひ落す神の鋭き秋の風である。戦争は人類の爲に秩序と階段とを齎らす正義の劍

であるといふことは、無論腕力・獸力・暴力が正義の尺度であるといふ事ではない。戦争は決して單に腕力沙汰ではない。腕力強き者が戦争に勝つが如く思ふものは、戦争のせの字も知らぬものである。腕力と云ふ點に於て、我等日本人は決して支那人・歐米人に勝るものではない。若し腕力が勝敗の決を定めるものならば、我等は永遠に戰敗者の運命より脱することは出来ないかも知れない。

戦争成立の條件、即ち戦争をして始めて可能ならしめるものは、實に義勇公に奉ずるの心であるとは我

等のつねに説いて居る所である。此の道義的英雄的精神なくしては、戦争に勝つは愚か、既に戦争そのものが不可能である。私欲・私情を超越して、偏により高きもの、即ち上に仕ふるの心に燃えずして、大いなる戦争を勝利の光榮に導く事は、全然不可能の事である。かくして勝敗の決を定める最も重大なる要素の一は、實に道義的精神である。

而してその第二は強盛なる智力である。近世一切の進歩せる科學を應用して、金城湯地と固めたる近世の要塞を攻め、或は百萬の大兵を蜿蜒數百里に互

りて動かすに當りては、殆ど吾人の想像も及ばぬ優越透徹緻密精細なる智力に依らなければならぬ。而して透徹明晰なる智力の必要なるは獨り軍に將たる者のみに限らない。一艦を動かし、一飛行機を操縦し、一砲を操り、一隊を指揮するにも、智力はその缺く可からざる要件である。而して軍事資金、即ち金力が戦争の根本的條件たる事は、ことさら茲に言ふの必要なきまでに明かである。ナポレオン嘗て人に戦勝の秘訣を問はれ、「一も金、二も金、三も金」と答へたと云ふ事である。然るに、金力即ち一國の富力

は、或意味に於て國民平時の勤勉努力企業の結果に外ならない。

かくして戦争は實に人間一切の力の發揮せられる所である、一國國民總べての力の集中する焦點である。かくして戦争の結果は最も詐なく飾無き國民その時の實力の評價である。

若し人類の間に戦争がなかつたならば、既に向上の猛志を消耗し盡して、爛熟頹廢せる國民が、その一度占めたる地歩の上に立つて、文明高尙優美老熟等の美名、いな虚名の下に、居常徒に倨傲尊大、永く天下の

權を私するであらう。而してかくの如き頽廢爛熟せる國民の支配の下に、人類は遂にその健闘・向上の精神を消磨し去らざるを得ない。かくして戦争は獨り神の正義の劔であるばかりでない、また實に向上の鞭である。懶怠豚の如き人類を驅つて、向上嶮の路を踏ましめるものである。

人類は實に戦争に依りてその總べての能力を發揮し、その精神を砥礪し、その自然性に鍛鍊陶冶の工を加へて來た。人類のうち最も美はしく、最も貴く、最も善きものは、凡て戦のうちより生れ出でたもので

ある。日本的精神のうち最も貴く美はしきものは佛教でもなければ、無論また儒教でもない、實にその武士的精神である。僕は羞耻の感なくして此の武士的精神なき日本國を考へる事は出來ぬ。而して此の高貴なる武士的精神はその名の之を示すが如く、實に戦の中に生れたものであつて、決して坊主や腐儒の云ふが如く、印度や支那の教の生んだものではない。佛教・儒教の武士的精神に及せる感化は、何處までも感化に過ぎない。精神そのものはこれら印度・支那の教より獨立して、日本固有の精神のうち

に、劔戟の閒より生れ出でたものである。武士的精神、これ我等國民的精神の最も美はしい劔戟の火花であり、その最も強い矢叫の聲である。純潔・崇高にして後人の模倣を許さぬ彼の燦然たる希臘文明は實に戦の子であつた。個人としては希臘人はオリムピアにその力を競ひ、その詩才を競うた。而して彼等の市は互に鎬を削つて絶えずその優越を争うた。此の如く戦の中に鍛錬陶冶せる力を以て、小さき希臘國民は紀元前四八〇年ペルシヤ百萬の兵に對する事が出來たのである。希臘の文

Olympia

Persia

Scrates

Plato

學・藝術にして、何れか戦争のうちから生れなかつたものがあらう。而して希臘精神最高の産物であつた哲學また實にその例に漏れぬ。人類のうち最も強き哲學的精神に生ける偉大なるソクラテスの逸話にして傳へらるゝもの、その多くは戦場に於ける逸話である。彼は戦の閒にその哲學的精神を練つたのであつた。而して世界第一の哲人プラトンは哲學的修養を以て武士的鍛錬の基礎としてゐる。鷹の如く鋭き眼、鐵の如き堅き意志、疾風・迅雷の如く神速にして而も正確誤たざる判断、而して巖をも碎

かん斷行の勇は實に軍人教育の特色である。

(最近思潮教育冬期講習録)

大正國語讀本(修正版)卷六終

大正五年十二月廿二日訂正印刷  
 大正七年九月廿六日訂正印刷  
 大正七年十二月十五日修正再版發行  
 大正七年十二月十五日修正再版發行

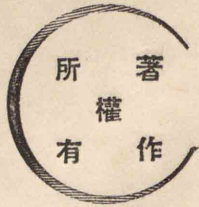
大正國語讀本修正版全拾册

定價
卷一・二 各金三拾四錢
卷三・四 各金三拾錢
自卷五至卷十 各金三拾錢

著者

東京市麴町區土手三番町三十六番地

保科孝一



印刷者

東京市牛込區白銀町貳拾番地

佐久間衡治

株式會社 秀英舍

發行所

東京市牛込區白銀町二十番地  
振替口座(東京)七四二番

合資會社 育英書院

東京市京橋區南傳馬町二丁目  
振替口座(東京)二八〇九番

目黒書店

